

イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の事例研究  
：徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡を中心に

A Case Study of Human Relations at *NAKAMURA*  
Store in Istanbul  
: *Torajirô YAMADA's* Letters to *Sohô TOKUTOMI*

メルトハン・デュンダル

Merthan A. DÜNDAR

三 沢 伸 生

Nobuo MISAWA

はじめに

19世紀末にイスタンブルにおいて、日本とオスマン朝との間に貿易事業を展開するために、中村商店という個人商店が創設された。

1890（明治23）年に勃発した「エルトゥールル号事件」は日本とオスマン朝との関係の起点とされている。しかし実際には1922年にオスマン朝が滅亡するまで、両国間に外交関係は樹立されず、国家主導による通商関係が整備されることはなかった。こうした状況において、1914年に第一次世界大戦が勃発するまで、中村商店は一介の私企業として、両国間の貿易事業を推進すべく奮闘努力していたと言われる。

しかしながら中村商店の実態はほとんど解明されてきていない。大阪の中村一族の出資によって設立されたものの、正確にいつどのようにイスタンブルにおいて設立されたのかも確認できていない。<sup>(1)</sup> 長らく中村商店に関する史料は主管格であった山田寅次郎（1866～1957年）の断片的な言及にのみ頼らざるを得なかった。<sup>(2)</sup> ようやく近年になって、日本およびトルコにおいて複数の研究者の努力により、埋もれていた史料が発掘されはじめてきている。現在、こうした新史料に基づく実証的研究が進められており、中村商店の実態が明らかにされつつある。<sup>(3)</sup>

この研究状況のなか、本稿では、イスタンブルにおいて中村商店の創設に深くかわり、また主管として長らく勤務していた山田寅次郎が、1896（明治29）年にイスタンブルにおいて初めて知遇を得た徳富蘇峰（本名：徳富猪一郎、1863～1957年）に宛てた書簡のうち現存が確認されている19

通の書簡の分析を通して、中村商店を舞台とする人間関係の一つの事例研究としてその詳細の解明を試みるものである。

## I. 史料

1896(明治29)年に徳富蘇峰は深井英五(1871～1945年)を伴っての欧米視察旅行途上にイスタンブルを訪問し、その際に中村商店の接遇を受けて、初対面である主管である山田寅次郎に様々な便宜を図ってもらったことが知られている。徳富蘇峰と山田寅次郎との交流をしめす史料として、山田が刊行した『土耳古畫観』に所収される、徳富蘇峰のイスタンブル訪問時の手書き謝辞の写しと、同書刊行にあわせて寄せられた書簡、さらには山田寅次郎の評伝内のわずかな記述が残されている。<sup>(4)</sup>

しかしながら徳富蘇峰は自身の欧米旅行の全貌を記録した書物を残していない。旅行中の事情は、その間に郵送されて『国民新聞』と『国民之友』に掲載された幾つかの寄稿文、そして書簡史料を通してうかがい知ることが出来るのみである。

今日、徳富蘇峰に宛てられた書簡の多くは、徳富蘇峰記念館(徳富蘇峰記念塩崎財団)、追遠文庫、淇水文庫、成蕢堂文庫、同志社大学学術情報センター情報資料室といった諸機関に保存される。

杉井六郎氏は追遠文庫に収蔵される徳富蘇峰の家族宛書簡、徳富蘇峰記念館に所蔵される民友社員に宛てられた書簡類などを用いて、徳富蘇峰の欧米旅行の全貌を解明された。そこで本稿では、杉井氏が研究に用いられなかった、徳富蘇峰記念館に所蔵される徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎書簡を分析して、イスタンブルに創設された中村商店の実態の一端を解明しようと試みるものである。これに呼応する山田寅次郎宛の徳富蘇峰の書簡は発見に至っていない。これらの山田寅次郎書簡は徳富蘇峰研究にとってはあまり重要ではないかもしれないが、史料の乏しいイスタンブルの中村商店の実態研究、さらには日本・トルコ関係史にとっては極めて重要な史料である。

なお具体的な共同研究を進める上で、作業を分担してデュンダルが山田書簡を収集して書簡文面を校訂し、そのうえで三沢が協力して内容に関して補完史料を探索しながら文面内容を調査・研究したものである。<sup>(5)</sup> よって共著である本稿において執筆分担および文責にかんしては校訂・図版部分をデュンダル、それら以外の全ての部分を三沢が担う。なお校訂にあたり、判読不能部分は■、判読未確定部分は□で囲って示している。

## II. 徳富蘇峰の欧米歴訪期間中

1896(明治29)年5月20日、徳富蘇峰(33歳)は深井英五を伴って横浜から出航した日本郵船の

貨物船アバパンサス号に便乗してヨーロッパを目指した。同船は同年7月に紅海へ至り、スエズ運河経由で地中海に入って、7月27日にフランスのマルセイユ港に到着した。<sup>(6)</sup> ついで同船はジブラルタル海峡を経由して、8月11日にロンドン近郊に到着した。徳富蘇峰と深井英五とは最初の目的地であるロンドンに暫し滞在後に踵を返してヨーロッパ大陸に戻り、同年9月1日にベルリンに到着し、3週間弱の滞在后、9月19日にポーランドのワルシャワを経由して、ロシアに至り、10月8日にトルストイを訪問し、10月18日午後2時に黒海沿岸のオデッサを発して南下し、10月22日午前8時にイスタンブルに上陸した。両者は約1週間のあいだイスタンブルに滞在し、10月30日に黒海航路でもってルーマニアのブカレストに向けて出発した。

この間、徳富蘇峰と深井英五とはイスタンブルに開設されていた中村商店の主管たる山田寅次郎の世話を受けている。徳富蘇峰はこの欧米旅行期間中の見聞・体験をほとんど公刊していない。そのためイスタンブル訪問についても著作物では『蘇峰自伝』に「予と世界漫遊」と題した章で「…それより黒海を渡ってコンスタンチノーブルに至り、コンスタンチノーブルから引返してコンスタンザに至り…」と訪問の事実を記すのみである。<sup>(7)</sup> このため両者のイスタンブルにおける活動の詳細は、徳富蘇峰および民友社関連史料のなかでは、民友社の刊行物である『国民新聞』と『国民之友』とに寄せた記事、さらには関連する書簡とに依拠するしかない。

前者に関しては、『国民新聞』に掲載された寄稿の中に「土耳其に於ける皮相一斑」（ウィーン、1896年11月18日発信）、「君士丹丁堡」（ローマ、1896年12月5日発信）「蘇峰生の書簡」（イスタンブル？、1896年10月27日発信）、『国民之友』に掲載された「近東と極東」（ウィーン、1896年11月17日発信）とである。<sup>(8)</sup> 後者に関しては、追遠文庫に保存される徳富蘇峰が父一敬宛あるいは逗子に送った10月23日付書簡、10月27日付書簡、10月29日付書簡、10月30日付書簡（＝イスタンブルの景観を写した絵葉書）の4通の書簡が最も重要であり、<sup>(9)</sup> 本稿で扱う山田書簡はそれを補う史料である。上記の4通の徳富蘇峰書簡と山田書簡a～h（写真①～⑧、校訂a～hを参照）に基づくと、イスタンブル滞在期間中の徳富蘇峰たちの行動は下記のように整理できる。

10月22日朝8時に恐らくはカラキョイ（Karaköy）からカバタシュ（Kabataş）にかけて広がる外国船船着場に徳富蘇峰と深井英五の乗船が到着した。徳富蘇峰は山田寅次郎とはそれまで知己ではなく、イスタンブルにおいて知り合いとなった。逗子の家族に宛てた10月23日付書簡に「当地ニハ日本人ニて山田寅次郎と申す人あり、同人船中迄出迎ひ万事好都合ニ候」と書き記している。<sup>(10)</sup> ここに記されているように22日朝に山田が徳富蘇峰らを船の中まで出迎えることが出来たのは、山田書簡a～hにしばしば言及されている徳富蘇峰の知己たる朝比奈知泉（号は「磔堂」または「珂南」、1862～1939年）を介して彼らの到来を事前に知りえた（迎えを依頼されていた？）ものと推測される。10月27日付書簡に別添えの写真の説明として「…一人は山田寅次郎と申ス仁にて、当地にある日本唯一の商店の主人ニ候。当人ヨリ尠カラヌ世話ニ相成申候。」と徳富蘇峰が記しているように、山田は初対面の徳富蘇峰と深井英五に対して、以下に整理するようにまめまめしくイスタンブル滞在中の案内に奔走する。<sup>(11)</sup>

到着当日である22日の行動は不明であるが、10月23日付書簡には旧市街の旧ヒッポドーム (At Meydanı) とアヤソフィヤの記述がみられ、一行ははやくも旧市街を散策したのかもしれない。

10月23日の金曜礼拝に際して、両者は山田の案内により金角湾の北方に位置するユルドゥズ宮殿内のハミディエ・モスクの来賓席 (蘇峰の表現によれば「…寺院前の御成道ニ臨める棧敷」) において何名かの外国人貴顕に混じってスルタンのアブデュルハミト2世が礼拝に赴く様子を参観する榮譽に浴している。<sup>(12)</sup>

10月24日の行動に関しては書簡からでは情報が無い。

10月25日に両者は山田の仲介で、ボスポラス海峡に面したイエニキョイ (Yeniköy) に位置するオスマン商工会議所 (正式名称 Osmanlı Sanayi ve Ticaret Odası / フランス語訳名 Chambre de Commerce d'Agriculture et d'Industrie de Constantinople) の役員であるスピラキ・アレキサンドリディ (Spiraki Alexandridi) 氏の邸宅を訪問している。一家のもてなしでボスポラス海峡沿いを散策し、夕刻には海峡でセイゴ釣りに興じた。山田書簡bにおいて追記で釣魚のことを触れられているのは、この日のことを念頭においてであることが分かる。さらにそのまま徳富蘇峰らは同氏邸に宿泊している。

10月26日に徳富蘇峰はアルメニア人医師と会話し、アルメニア人問題について聞き取りを行っている。またボスポラス海峡を散策し、その帰途に市場 (グランドバザールか?) を見学して絨毯を購入した。

さらに日程は特定できないが27日までに、徳富蘇峰と深井英五とは金角湾内の軍港においてオスマン海軍軍艦の艦長と知己になり、その乗艦を見学させてもらっている。この艦長が山田書簡bとgとに言及されているルザー・ベイ (Rıza Bey) である。

10月27日に関しても行動を特定できる情報に欠ける。

10月28日の朝早くに徳富蘇峰と深井英五とはイスタンブルのアジア側に渡った。ここで汽車を待っていたというのでハイダルパシャ (Haydarpaşa) 駅に赴き、暫し汽車で近郊旅行を楽しんだものと思われる。

10月29日の夜、徳富蘇峰と深井英五とは居酒屋において有名な新聞記者と面会した。<sup>(13)</sup> このことから両者が民友社の人間としてメディア活動も行っていたことがわかる。さらに山田書簡aとdとから現地の宗教論者に原稿を依頼していたことがうかがえる。

また10月27日までに徳富蘇峰と深井英五とは、山田と3名して、新市街のペラ地区のアブドゥッラー・フレレ (Abdullah Frères) 写真館にて記念写真を撮影した。この写真は10月27日付書簡に別封にて送付すると記されている。<sup>(14)</sup>

10月30日に徳富蘇峰はイスタンブルを出立する前に、記念写真の裏面に歌を記している (写真⑭参照)。山田書簡aによれば、この日の午後、山田が両名を見送りに入っている留守の間の入れ違いに式部長官のメフメト・パシャ (Mehmet Paşa) の子息がユルドゥズ宮殿を案内するためにホテルを訪れている。この子息は前日29日にもホテルを訪れていたが意思疎通が出来ないままに終

わっていた。山田書簡bによれば招待は式部長官の厚意によるものであったようである。

ルーマニア、ハンガリー、オーストリアを経てイタリアに到着した徳富蘇峰と深井英五とは、ローマついでパリからイスタンブルの山田（さらにはメフメト・パシャ、スピラキ、ルザー・ベイ）に近況を知らせる書簡を投函したことが山田書簡cとdから分かる。この山田書簡cは徳富蘇峰からの来簡への返信として徳富蘇峰らの次の逗留目的地であるパリに宛てて投函されたもので、このなかで山田は徳富蘇峰らが知遇を得た知己たちの近況とロシアの朝比奈知泉からの書簡情報を書き記している。この記述内容も先に述べたように徳富蘇峰と山田寅次郎とを結びつけたのは朝比奈知泉であることを示す。

朝比奈と山田とは下記のような経緯で知己になったものと判断できる。1896（明治29）年3月下旬、東京日日新聞主管たる朝比奈知泉は、徳富蘇峰の出発に2ヶ月ほど先立って、欧米視察旅行に出発した。本人の弁によれば、東京日日新聞からは一切の資金を得ず、日清戦争に際して朝比奈の功績を認めた伊藤博文からの報奨としての外遊であったという。<sup>(15)</sup> 朝比奈は初めカナダ・アメリカに渡り、ニューヨークからロンドン・ベルリンを経由してロシアのサンクトペテルスブルグに入り、ニコライ2世の戴冠式に参列した。この地において朝比奈は同じ民間ジャーナリストとして参列した望月小太郎（号は「鶯溪」、1865～1927年）と出会う。<sup>(16)</sup> 朝比奈と望月とはロシアからフランス、イギリスへと渡り、6月20日にヴィクトリア女王即位60周年記念式典に参加してからのち、バルカン諸国を歴訪すべく南下した。両者はルーマニア、ブルガリアなどを経て、7月12日にイスタンブルに到着した。ここで朝比奈と望月とは中村商店を訪問し、山田寅次郎の歓迎を受けることとなった。ここではじめて朝比奈と山田は知己となった。朝比奈は「…予は始めて君士但丁堡府で相識つたのが…」と明確に証言しているが、続いて記される山田のイスタンブル到来経緯は史実ではない。<sup>(17)</sup> この最初の滞在期間に山田は、陸軍大臣のゼキ・パシャ（Zeki Paşa）、外務大臣のテヴフィク・パシャ（Tevfik Paşa）、侍従武官長のオスマン・パシャ（Osman Paşa）を朝比奈に引き合わせている。

山田は、オスマン朝へと渡る以前に、東京において書生として政治活動・出版事業に手を広げていた。同時期に朝比奈も東京帝国大学に籍を置きながら、様々な文筆活動を展開していた。しかし東京において朝比奈と山田（さらに後述のように徳富蘇峰と山田）との間に接点はなかった。だが朝比奈がイスタンブル訪問に際して中村商店の存在を知らなかったとは考えにくい。朝比奈は何らかの伝手をもって渡航したと考えるのが自然である。山田は書生時代に、幸田露伴と知遇を得ていた。<sup>(18)</sup> そもそも幸田露伴の処女作を版元である金港堂に売り込み談判におもむいたのが山田であった。幸田露伴は、1890年のエルトゥールル号事件を千載一遇の契機としてオスマン朝と日本との間に貿易事業を創始すべくイスタンブルへと渡った山田をモデルに掌編「書生商人」を書き上げた。この小説において山田をモデルとした吉田は幸田露伴自身をモデルとした山口に対して「…それよりそれと手蔓になるべき方もあらば痛痒關せぬ方にてもよければ御紹介下されたく尚我が計畫に同意の人の生ぜんため精々御吹聴下されまし」と依頼をしている。<sup>(19)</sup> 幸田露伴は、かつて徳富蘇峰と朝比奈知泉とが組織した文学会（1888年創設）に参加しており、<sup>(20)</sup> また徳富蘇峰の『国民新聞』（1890



年創刊)の創刊に際して歌を寄せおり、<sup>(21)</sup>さらに朝比奈が創刊号に発刊の辞を書き上げた春陽堂の文芸誌『新小説』(1889年創刊)にも関わりが認められる。もちろん幸田露伴が朝比奈に対して山田を紹介したという事実が確認できるわけではないが、山田が幸田露伴を含む旧知の書生仲間に対して関係者の紹介を依頼したことが、何らかの形で朝比奈(さらには徳富蘇峰)のもとに山田に関する情報が達する契機になったのではないかと想起される。中村商店さらに山田寅次郎をめぐる人間関係を考察する場合に、この書生間のネットワークの存在を検証することが重要である。

朝比奈と望月とは13日間の滞在ののちに、7月24日にブカレストに向けてイスタンブルを出発した。なお後世に望月はイスタンブル滞中に際して、自ら「日本外交家」の肩書きの名刺を配っていたと揶揄されている。<sup>(22)</sup>朝比奈と望月とはルーマニアを暫し旅行(その際にブカレストにおいて逋信省郵便局長の田健治郎(号は「讓山健」、1855～1930年)と同省役人の松永武吉と田中健士とに遭遇する。この3名はハンガリーのブタペストで開催された万国郵便会議に出席したのちにこの地まで足を伸ばしていた)したのち、<sup>(23)</sup>7月31日に経由のために再度イスタンブルに戻り、8月1日にアテネに向けて旅立った。アテネにおいて望月は日本への帰国の途につき、朝比奈はロシアへと戻った。<sup>(24)</sup>この小旅行を契機に、朝比奈は自他とも認めるようにオスマン朝を含めてバルカン諸国に興味関心を強く抱くようになる。

1896年8月11～18日に、朝比奈から紹介を得てであろう、前述の田健治郎・松永武吉・田中健士がイスタンブルを訪れた。<sup>(25)</sup>山田書簡aとbに記される田君とは田健治郎のことであり、彼らもまた山田の世話を受けたことが分かる。イスタンブルの中村商店における人間関係のネットワークはこのようにして広がっていったのである。

朝比奈がバルカン旅行からロシアへと戻った8月、前述のように徳富蘇峰と深井英五とはロンドンに滞在している。恐らくはロシアの朝比奈からロンドンの徳富蘇峰に、イスタンブルの中村商店の情報および山田を紹介する書簡が宛てられたのでないだろうか。そして徳富蘇峰自身あるいは朝比奈知泉から事前に徳富蘇峰と深井英五のイスタンブル訪問予定が知らされていたからこそ、前述のように山田は両者を船まで迎えに行くことができたものと判断される。朝比奈が徳富蘇峰に山田を紹介する直接的な史料は発見されていないが、同志社大学に所蔵される1897(明治30)年1月19日付の徳富蘇峰に宛てた朝比奈書簡には、「拜啓君斯坦丁堡在留山田氏を経而兄及深井君写真を得并に兄の返状を審にするを得本懷不過之尚同氏へ度々之御伝言万謝々々…」と記され、間接的ではあるが朝比奈知泉が徳富蘇峰に対して事前に山田を紹介した可能性を想起させうる。<sup>(26)</sup>またこの書簡に記されているイスタンブルにおいて山田と共に撮影した前述の記念写真は、ロシアの朝比奈に送られたことが確認される。山田書簡aの記述から、徳富蘇峰の依頼を受けて山田が焼き増しを作成し、徳富蘇峰の知己たちに7枚(うち1枚はロシアの朝比奈知泉宛)に郵送したことが確認されるのである。また山田書簡により、徳富蘇峰は山田を介してイスタンブルの知己3名、すなわち前述のメフメト・パシャ、スピラキ、ルザー・ベイにも同じ写真を贈り、さらに日本から彼ら3名に

日本画を贈呈する手配をとったことが分かる。

1896（明治29）年にイスタンブルを訪問した朝比奈知泉・望月小太郎と徳富蘇峰・深井英五は、山田の世話を受けたことを証言しているが、総員が中村健次郎の存在あるいは中村商店の様子について全く言及をしていない。徳富蘇峰の外遊中に記された山田書簡が1点を除いて中村商店のレターヘッド便箋を用い、中村商店の住所入り封筒でもって投函されていたことから、この時点において山田の活動拠点が大阪の中村一族の出資になる中村商店であることは間違いない。<sup>(27)</sup> 山田書簡において山田が徳富蘇峰に愚痴をこぼしているように、商店は事務所ではなく商品を陳列する店舗であり老若男女の客が訪れていることが分かる。こうした状況から少なくとも朝比奈が到来する1896年7月現在まで中村商店は山田が一人によって切り盛りされていて、出資者たる中村健次郎をはじめとする中村一族の人間がまだイスタンブルに到来していないものと判断される。<sup>(28)</sup> 稲葉氏は中村健次郎のご子息である中村譲氏の証言に基づき、1893（明治26）年に中村健次郎が山田とともにイスタンブルに渡って中村商店を開いたとするが、<sup>(29)</sup> 1894（明治27）年6月30日付けで山田が第百銀行の池田健三に宛てた以下の書簡の内容から判断して大いに疑問が残る。

「…扱當地商品陳列館に於て日本品は特に當國人の嗜好に投じ加之當國皇帝陛下日本貿易開途の事と兼て御懇望に被為渡ひに付此際別に日本品販賣所を開設致すことに定めんと兼て小生日本出帆頃より本館々員等の盡力を以て小生當地に着と同時に右商品陳列館附属日本品販賣所をも開設致す可き特許を受け館頭には皇帝陛下の御章號を掲げ得可きことに相成當地の信用一層厚きを加へ開館後評判頗る宜敷御座ひ右に付日本にては神戸三の宮町五百七拾九番地淺田徐五郎氏を以て本館の代理店と相定めし儀に付以後當地の事に付何ぞ御質問にても有之しえば同店に御問合被下度先は段々の御厚情を謝し併て右申上げ御一同様にも御序に宜敷御傳受事願ひ

追伸 當地の儀に付御用向有之いえば御申越被下度精々盡力可致は草々以上」<sup>(30)</sup>

この書簡内容が事実とすれば、山田は1892（明治25）年4月から数ヶ月の調査滞在において、知己となったスピラキ氏の厚意により、オスマン商工会議所内に自ら持参した日本商品を見本として陳列し、再訪問以前からオスマン商工会議所の協力を得て、商工会議所に付属する形で日本品販賣所を開設すべくオスマン朝から許可を得るなど準備を進めていたことが分かる。イスタンブルに戻ってきた山田は1893年から1894年のあいだにかけて、この販賣所の開店に漕ぎ着けた。これがイスタンブルで初めて開設された日本商店である。しかしここでは中村商店を名乗らず、中村一族から出資を受けたことも示されていない。また山田が日本代理店として示しているのも中村一族ではなく神戸三宮の淺田徐五郎である。1894（明治27）年9月18～25日に細川護成の陪員として細川とともにイスタンブルを訪問した池辺吉太郎（号は「三山」、1864～1912年）は山田を訪ねている。池辺によれば山田はスピラキ邸に寄宿しながらペラ地区に商店を構えていたが、池辺は中村商店とは記述していない。<sup>(31)</sup> したがって1894年9月以降において、何らかの問題が生じて、山田は経営権

を譲る形で中村一族からの出資を仰ぎ、中村商店が誕生したものと想起される。

この想定を裏付けるように、中村一族の中村為三郎に関する人名事典の短い記述に「…明治二十九(1896)年再び海外視察を企て土耳其に遊びて帰朝するや土耳其方面の貿易に着手し、同国主都に店舗を設置して彼我貿易に従事す」とあり、<sup>(32)</sup> この記述が真実ならば、朝比奈がイスタンブルを訪問する以前の1896年7月までに山田の事業に中村一族が出資して、山田の日本品販売所が中村商店へと衣替えしたのかもしれない。しかし前述のように中村議氏の回想には中村為三郎が関与したとことは指摘されておらず、さらなる史料の探索と検証が必要である。

山田書簡aとbに示されるように、ロシアに戻った朝比奈知泉はロシア語を勉強しつつ自らの近況を山田に知らせている。ついで山田書簡cにおいて、朝比奈は徳富蘇峰に対してそうしたように、ロシアを訪問中の寺内正毅少将(後に元帥、1852～1919年)、さらに徳川頼倫(1887～1925年)とその随行者である鎌田栄吉(1857～1934年)らにイスタンブル行きを勧めている。1896(明治29)年3月8日に徳川頼倫はケンブリッジ大学留学と欧米諸国視察旅行のため鎌田栄吉とともに日本を発ち、4月18日にフランスのマルセイユに上陸してヨーロッパ各国を歴訪していた。彼らの欧米諸国視察旅行は鎌田の著した旅行記でその梗概を知ることができる。<sup>(33)</sup> ただ鎌田の旅行記は日程の記述や活動内容の具体性に欠けており、ロシア、オーストリア、ブルガリアを経てイスタンブルへと到着したことが分かっていたが詳しい到着時期など不明であった。山田書簡dとeによれば、徳川頼倫ら一行は12月初旬から26日までイスタンブルに滞在して山田の接待を受けていたことが確認される。寺内は1896(明治29)年6月28日に欧米視察旅行のために東京を出発して、パリに滞在した後ウィーンに到来し、この地に在留の立花小一郎大尉(後に大將、1861～1929年)を臨時副官に徴用してバルカン諸国視察に向かい、ハンガリー、セルビア、ルーマニアを経て、イスタンブルに至り、アブデュルハミト2世との謁見を果たし勲一等メディチエ勲章を贈呈されたという。<sup>(34)</sup> 伝記によれば寺内のイスタンブル訪問は10月中であるかのようなようであるが、これでは徳富蘇峰の滞在より前になってしまう。山田書簡dによれば12月12日現在、寺内は到来しておらず、山田書簡eによれば年末近くに到来し、6日間滞在して軍を視察し、アテネ経由でベルリンに向かったことが確認される。寺内の伝記には朝比奈の滞在するロシアへの訪問は記されておらず、伝記の記述内容を別史料で確認をしなくてはならない。

山田書簡の特徴として、後の『太陽』への寄稿に取り上げられるアルメニア人問題やクレタ島事件などが触れられることもあるが、総じて時事問題の情報は少なく、知己の近況情報が圧倒的に多い。<sup>(35)</sup> 今まで取り上げた人間のほかに洞月和尚とお松老髯なる日本人に言及されているが特定に至っていない。前者は本願寺派僧侶の伊藤洞月かと思われる。このように中村商店をめぐる人間関係の全容は解明に至っていない。

1897(明治30)年、徳富蘇峰は『国民新聞』に「希土開戦の由来」という海外通信を寄稿した。<sup>(36)</sup> 同年4月に、朝比奈知泉は希土戦争の取材を兼ねて朝比奈はイスタンブルを再訪して、山田と再会した。<sup>(37)</sup> ここで注目すべきは、朝比奈が「…再遊せし時には店主(筆者注:中村久兵衛)の弟にし



て海軍大尉たりし中村健次郎氏（八代六郎大将と同窓なりし人）も來り居て、山田氏と併せて在留邦人は終に二人。…」と記しており、1896年11月から1897年4月までの間に中村健次郎がイスタンブルに居留すべく渡ってきたものと判断できる。<sup>(38)</sup>

ロンドンに宛てられた最後の書簡である山田書簡h（校訂h、写真⑧参照）には、アメリカに渡り帰国の途につくことが近づいてきた徳富蘇峰に対して、山田は旧来の知己である幸田露伴と高橋七郎（＝高橋太華、1863～1947年）、身内である従姉妹の村松志保子、イスタンブルにおいて知遇を得た望月小太郎と洞月和尚への自らの近況を伝えて欲しいと願い、さらには徳富蘇峰の知己である著名人として清浦奎吾と大隈重信などへのとりなしを願っている。イスタンブルの山田にとって、旧知の人間関係はもちろんのこと、新たに築き上げた人間関係の維持、さらなる人間関係の拡大が必要であったのである。<sup>(39)</sup>

### Ⅲ．徳富蘇峰の帰国後

徳富記念館に所蔵される書簡を見る限り、徳富蘇峰が日本に帰国してから山田寅次郎との間に活発な書簡の遣り取りは確認されない。

その一方で、徳富蘇峰とオスマン商工会議所のスピラキ氏との間には3往復書簡の交換があったと知られる。1899（明治32）年年始、徳富蘇峰は彼の家族からの民友社宛の書状によって氏が逝去したことの報を受け取り、短いイスタンブル訪問時に同氏と同氏の家族から受けた厚遇を回顧している。<sup>(40)</sup> その旧日譚で、徳富蘇峰と深井英五とがルーマニアに向かいボスポラス海峡を北上してイエニキョイを通過する際に、船上からハンカチを振り、それに応じて一家がハンカチを振ってくれたことを述べている。山田書簡aに記されるハンカチの話はこれと符合する。

同じく1899年、徳富蘇峰の古くからの学友がイスタンブルを訪問している。家永豊吉（1862～1936年）は台湾総督府から依頼を受けてアヘン調査のために、イラン、オスマン朝、エジプト、インドを歴訪し、その見聞を7通の書簡として徳富蘇峰に送った。徳富蘇峰はこれらをまとめて『西亜細亜旅行記』として民友社から刊行した。この書によれば、家永は5月17日に台北を出発し、イランを調査した後、9月終わりにイスタンブルに到着した。家永はイスタンブルにおける行動を記していないが、長場氏が指摘するように、スミルナ（イズミル）において「余は在君斯坦堡知人の紹介により…」と記していることから、徳富蘇峰と山田との関係からみて、徳富蘇峰から紹介をされてイスタンブルで山田寅次郎と接触した可能性が極めて高いと思われる。<sup>(41)</sup>

この時期に徳富蘇峰宛の山田書簡の存在は確認されていない。そこで本章では補完史料として様々な日本人叙述史料を中心に中村商店をめぐる人間関係を整理するものとする。この頃の中村商店の実態、山田寅次郎の活動については不明な点が極めて多い。上記のように1898（明治31）年にスピラキ氏が死去したことは、山田と中村商店にとって打撃であったと想像するに難くない。その

一方で、この年の夏にはオスマン朝皇室が和風建築の建設を中村商店に依頼してきたことが『報知新聞』に報じられている。<sup>(42)</sup> そうした中において山田はイスタンブルに継続的に留まることはなく、周辺諸国の探訪さらには日本への一時帰還など活発に活動していたことが確認されているが、その詳細は必ずしも詳らかではない。

日本とオスマン朝の双方に散在する史料から、1899(明治32)年に山田が一時帰国した事実が確認されている。この一時帰国に際して山田が徳富蘇峰と再会を果たしたかどうか不明である。一方、山田は朝比奈知泉からは歓迎を受け、7月28日18時に烏森濱の家において佐々友房、島村久など15名が集って各国視察談話が催され、山田はオスマン朝の商況について講演した。<sup>(43)</sup> またこの集りとは別であろうか、山田自身の記述によれば朝比奈は佐々友房ともにイスタンブルを訪問した貴族・著名人を集めて会を催し、これを「新月会」と名づけて一種の民間友好団体を組織し、その名簿と抱負とをトルコ語・フランス語で起草して、イスタンブルに戻ってからオスマン宮廷に提出したという。<sup>(44)</sup> この帰国の際に山田が朝比奈と朝比奈の知己である海軍大臣の八代六郎、玄洋社の杉山茂丸と撮影した写真(写真⑮参照)が山田の評伝に所収される。またこの帰国に際して山田は中村一族の中村たみと結婚し、中村一族と血縁関係を結んだ。<sup>(45)</sup> またこの間、1899(明治32)年8月11日から19日まで、近衛篤磨(1863～1904年)がイスタンブルを訪問し、中村商店では不在の山田に代わって中村健次郎が迎えている。<sup>(46)</sup>

1900(明治33)年に大蔵省の橋本圭三郎(1865～1959年)と農学博士の佐々木善次郎(号は「蘆舟」、1861～1933年)が煙草調査のためにイスタンブルを訪問し、山田寅次郎の接遇を得た。この訪問は後に山田のシガレット・ペーパー事業につながってくるが、この時期に山田が日本との間を往復し活動的であることが目を見く。<sup>(47)</sup>

こうした山田のイスタンブル以外における活動に関して、徳富蘇峰宛の山田書簡 i は大変重要である(写真⑨、校訂 i 参照)。徳富蘇峰宛の外国からの書簡は切手を切り取られることが通例であるが、この書簡は絵葉書のためか、切手のみが剥がされて消印をかるうじて判読することができる。文面に年号が記載されていないために消印から判断すると、1902(明治35)年10月にイスタンブルを発って11月1日にモスクワに着き、シベリヤ鉄道で日本に戻る直前に投函されたと思われる。続く山田書簡 j は、イスタンブルから投函された1903(明治36)年の年賀状である(写真⑩、校訂 j 参照)。すなわちこの年賀状が山田自身の記入・投函したものであるのならば、山田は日本に戻って極短期間で1902年末までに再びイスタンブルに戻った計算となる。

この1902(明治35)年冬に、イスタンブルの中村商店は日本人の珍客を迎えている。日本初の無銭世界一周旅行者と目される中村直吉(1865～1932年)は、本人の記述によれば同年5月7日にムンバイを発ってイランを徘徊し、海路イスタンブルに到着した。中村直吉は支配人の中村と店主の山田、すなわち中村健次郎と山田寅次郎の二人に会ったと書き残している。<sup>(48)</sup> しかし中村直吉の伝える山田寅次郎のイスタンブル到来経緯は野田正太郎の経緯であって史実とは異なる。この記述は中村直吉の記憶違いなのか、山田寅次郎の語りのせいなのかを確定する史料はない。この記述で

は、中村直吉の目から見て山田が成功域に達していること、中村健次郎からの聞き取りで商業取引の主たる相手はオスマン宮廷であり、西陣と金襴とが主商品であるという情報が残されている。残念ながら押川春浪と組んで編まれた中村直吉の世界旅行の記述には、小説仕立ての誇張・創作が散見され、また時系列表記が曖昧で、なおかつ執筆時の状況も書き加えられていることから史実を抽出・確定することが極めて困難である。しかし話の筋と無関係に挿入された中村商店の記述は真実を伝えていると判断して良いであろう。

中村商店の経営が順風満帆であったこの時期、日本の農商務省商工局は、1902（明治35）年から1908（明治41）年までのあいだに、コンスタンチノーブル私設商品陳列所（館）から不定期に報告を受けて、『農商務省商工局臨時報告書』に合計9通を掲載している。<sup>(49)</sup> 当時、中村商店以外にイスタンブルにおいて日本人の公的私的商業施設は存在しない。コンスタンチノーブル私設商品陳列所を自称するのは、中村商店であり、執筆者は山田寅次郎ないし中村健次郎と思われる（最後の1908年発信のものだけ後述のように中村栄一の執筆になるのであろう）。

1903（明治36）年5月18日、井上雅二（1876～1947年）がオデッサ領事の飯島龜太郎の紹介状を携えてイスタンブルに到来して中村商店を訪ねている。<sup>(50)</sup> 1904年（明治37）2月29日、オデッサ領事の飯島龜太郎および領事館書記生の松本幹之亮が対ロシア諜報活動のためにイスタンブルに到来した。飯島は元海軍大尉である中村健次郎の協力を仰ぎ、中村商店は全面的に協力して、ロシア義勇艦隊の通過を調べた。従来、山田個人の逸話として知られていたが、近年になってロシアと日本の文書史料を博搜した稲葉氏の研究によって、山田の役割は決して大きくなく、また中村商店の情報収集は十分なものとは言い難く、戦況を左右するものではなかったことが明らかとなった。<sup>(51)</sup>

中村商店が飯島への協力体制を強めていくさなか、同年8月、伊東忠太（1867～1954年）がイスタンブルに到来し、オスマン朝より許可を得てオスマン朝領内のフィールドワークを行った。その際に山田寅次郎と中村健次郎とは伊東の調査を大いに支援した。伊東の綿密なフィールドノートには8月1日から10月15日までの書簡について発信記録では、山田が38件と突出して多く、中村健次郎も3件を数え、同時期の受信記録でも山田からが29件と突出している。伊東の調査が山田の支援によって実現されたことを物語っている。<sup>(52)</sup>

以上のように、20世紀初頭において、中村健次郎のもとに山田寅次郎が仕えながら中村商店はオスマン宮廷を主たる貿易相手として商売にいそしみながら多くの訪問客を迎えて、様々な人間関係が展開していた。そのさなか時に山田は所用でイスタンブルを離れることもあったことが確認されるのである。

#### Ⅳ. 山田寅次郎の帰国と中村商店の閉鎖後

実のところ日露戦争後の中村商店の状況はよく分かっていない。さらに山田寅次郎の帰国年限お

よび中村商店の閉鎖年限も不詳である。その正確な日付を示す確たる史料は現在のところ発見されておらず、傍証的な補完史料に依拠せざるを得ない状況にある。

従来まで、筆者を含め、中村商店の閉鎖および山田寅次郎の帰国を、1914年の第一次世界大戦開戦後とするのを通例としてきた。その根拠は、現在まで何点か確認される山田自身の自伝の1つに記される、「…ヨーロッパに大戦が勃發した。…(中略)…この際は一時日本へ歸へられた方がよくはないかといはれたので歸朝した。」<sup>(53)</sup> および山田自身の監修の下に纏められた山田の評伝に記される「一九一四年歐洲第一次の戦争が起土耳其は独逸に同盟せるため、日本とは交戦こそ無けれ何となく不安の空氣ただよいたり、依て氏は一応土耳其の事務所を閉し歸朝することゝなりぬ。」という記述である。<sup>(54)</sup> しかし中村商店の主人たる中村健次郎の子息である中村譲氏の1999年の聞き取り調査に際する証言によれば、中村の帰国は1906(明治39)年、山田の帰国は1904(明治37)年ぐらいとのことである。<sup>(55)</sup> これと符合するように山田が1905(明治38)年に帰国して日本国内においてシガレット・ペーパー事業に乗り出していたことが知られている。<sup>(56)</sup> 従来まで、山田の日本における製紙事業は一時帰国期間中のものとみなされてきた。長場氏の比定によれば1906(明治39)年8月において、山田は「一応製紙事業の計画完成せるよりその製造機械購入と技師招聘の爲め急ぎ土耳其へ赴くことゝなれり」とのことであるが、<sup>(57)</sup> しかしこの記述だけでは山田がオスマン朝に戻ったことが仮に事実としても、戻ってから第一次世界大戦まで継続的にイスタンブルに滞在していたのかどうか不明であり、諸史料によって検証されなくてはならない。

これに対して、イスタンブルの中村商店をめぐる人間関係の当事者たちの残した著作物によって、従来まで信じられてきた山田のイスタンブル滞在年限が誤っている可能性が高いことを窺い知ることが出来る。

第一に注目すべきは日本とオスマン朝との間に外交関係が樹立する以前に、1907(明治40)年6月から日本陸軍よりイスタンブルに派遣された駐在武官の存在である。初代の森岡守成中佐(のち大將、1869～1945年)、1909(明治42)年10月より、佐藤小次郎中佐(のち中將)、1911(明治44)年12月から1913(大正2)年11月まで村岡長太郎中佐(のち中將)が駐在していた。また駐在武官が制度化されてからのち、第一次世界大戦を挟んでの空白期を経て、1920(大正9)年6月から1945(昭和20)年2月まで、桑木崇明中佐、橋本欣五郎中佐、飯村穰中佐、神田正種中佐、芳仲和太郎中佐、磯村武亮中佐、立石方亮中佐が着任していた。こうして第一次世界大戦開戦まで3人の駐在武官がイスタンブルに駐在していた。彼らの公的な活動の記録はほとんど残されていないが、森岡が晩年に執筆した個人的な回想録によって本人の着任時のイスタンブルの様子を知ることが出来る。森岡は「…中村商店の店員と會談して鬱を散ぜしこと屢々なりき」と記しているように、中村商店との関係を日常のものとしていた。<sup>(58)</sup> しかし森岡の伝える中村商店の開設経緯、とりわけ中村健次郎と山田寅次郎の話は混乱を來たして誤っている。このことも森岡と交流のあった中村商店の店員が中村健次郎と山田寅次郎でないことを示している。

森岡が交流を持っていた中村商店の人間とは、中村(登阪)栄一である。後に1911(明治44)年

に乃木希典大将（1849～1912年）がイギリスでのジョージ5世戴冠式参列からの帰路に吉田豊彦陸軍砲兵中佐を伴って、ドイツ・フランス・オーストリア・バルカン諸国の巡視の一環として、7月21日から24日までイスタンブールに滞在した。この際にオーストリア公使館付武官に転出していた森岡大佐は乃木大将に同行してイスタンブールを再訪した。中村栄一は日露戦争に派遣されたペルテヴ（Pertev）大佐らとともに一行の到着を出迎え、最終日も見送っている。滞在中、乃木はスルタンのメフメト5世に謁見し、陸軍大臣マフムト・シェヴケト・パシャ（Mahmut Şevket Paşa）の演説に耳を傾けている。<sup>(59)</sup> 乃木大将の訪問を2年遡り、1909（明治42）年には宇都宮太郎少将（後に大将、1861～1922年）がイスタンブールを訪問したと言われているが、その詳細は不明である。

中村栄一の活動については、イスタンブールを訪問した数多くの日本人短期滞在訪問者の著作物から確認される。まずは1906（明治39）年6月20日から23日までイスタンブールに滞在した徳富蘇峰の弟である徳富健次郎（号は「蘆花」、筆名に際しては「徳富蘆花」、1868～1927年）と同年8月20日から22日までイスタンブールに滞在した長谷場純孝（1854～1914年）とである。<sup>(60)</sup> また1908（明治41）年8月にイスタンブールを訪れた大蔵省の官僚である阪谷芳郎（1863～1943年）は、青年トルコ革命のさなかでアブデュルハミト2世への謁見を諦め、山田寅次郎が不在であったので中村商店の中村栄一の世話になったと記している。<sup>(61)</sup> ついで1909（明治42）年1月11日から15日までの間イスタンブールを訪問した、当時の日本を代表する出版社である博文館から世界漫遊に派遣されて訪問した坪谷善四郎（号は「水哉」、1862～1949年）、<sup>(62)</sup> および北濱銀行頭取の小塚正一郎（号は「蘇南（蘇南漁史）」、1869～？）がそれぞれに著作物を残している。同じ1909（明治42）年、黒板勝美（1874～1946年）が約2年間の欧米旅行の途上に2月17日から21日までイスタンブールに滞在している。また同年に勃発した3月31日事件でアブデュルハミト2世が廃位されてから約1ヵ月後に立作太郎（1874～1943年）が短期間ながらイスタンブールに立ち寄っている。翌1910（明治43）年前半、日本人初のメッカ巡礼を果たした山岡光太郎がアブデュルレシト・イブラヒムとともにイスタンブールに到来しているが、中村商店との接点は見出されない。同年11月30日から12月9日まで井上雅二がイスタンブールを7年ぶりに再訪した。このとき井上は「君府唯一の本邦商店中村の主人」すなわち中村栄一の世話を受けている。井上の談によれば、中村商店主人が日露戦後にアブデュルハミト2世に召されて、フランス語新聞に掲載された日本がイスラーム教を国教に選定したという記事の真偽を尋ねられたという。<sup>(63)</sup> その後、数年の間において1911（明治44）年5月にイスタンブールを訪問した星野行則（1870～1960年）も著作物において自身の滞在記録を残している。<sup>(64)</sup>

彼らの多くは、イスタンブールの訪問に際して、ペラ地区（すなわち今日のベイオウル地区）に位置する中村商店から便宜を供与されて、森岡よりも詳しい情報を書き残している。徳富蘆花は「土京唯一の日本部落なる中村日本雑貨店の支配人N君の案内…」と略記しているが、<sup>(65)</sup> 坪谷と小塚の記述によれば、中村商店には支配人のもとに数名の日本人雇用人がおり、支配人の名を米沢出身の中村（登版）栄一と明記している。<sup>(66)</sup> 短い滞在ゆえに中村商店に立ち寄っていないののだろうか黒板は旅行記の中で中村商店にかかわる記述を残していないが、立の記述によれば1909年の段階で中村



商店は中村栄一がひとりで切り盛りするようになっていた。<sup>(67)</sup>同様に、星野の記述からも中村栄一以外の日本人の存在はうかがえない。こうした記述には、森岡の記述と同じく中村健次郎および山田寅次郎の存在を確認することができず、彼らの帰還後を示すものと判断できる。

さらに星野によれば、中村栄一は夫人と長男を伴って、日本からイスタンブルにやってきた。1909(明治42)年に次男が誕生して後、栄一はチフスに罹患して一命をとりとめたものの、その間に夫人と長男もチフスに罹患して命を落とした。この状況を哀れんだ親友のトルコ人が次男の養育を引き受けてくれ、栄一は毎日曜日に次男に伴って夫人と長男の墓を訪れ、自らを励ましているとのことであった。<sup>(68)</sup>徳富蘆花は、中村栄一が侍従武官アリー(Ali)少佐と友人関係にあり日本語を教えていたと記しているので、この知己とはアリー少佐のことかもしれない。<sup>(69)</sup>また付言すれば山田の評伝には、山田が便宜を図った人間として徳富健次郎(徳富蘆花)は挙げられているものの、<sup>(70)</sup>森岡(および佐藤・村岡)、坪谷、小塚、立、星野の名を見出すことはできない。

長場氏は徳富蘆花と立の記述を引きながら、山田の不在を怪しみながらも一時帰国という山田自身の自己申告を認めている。先に挙げた阪谷も山田が一時帰国中と記していることから、当時の中村商店も山田を一時帰国扱いとしていたのかもしれない。それでもこうした著作物の記述を虚心坦懐に解釈するならば、中村譲氏の指摘どおりに、山田の自伝・評伝の記述とは異なり、遅くとも1906年もしくは1907年の段階で、山田はイスタンブルの中村商店には全く常駐していなかったと判断される。こうした状況のもと、先に示したイスタンブルから発信された1903年の年賀状より後、1926年に至るまでの長きにわたって山田と徳富蘇峰との間に書簡の往復は確認されていない。

第一次世界大戦後、日本において山田寅次郎は公私にわたって脚光を浴びる。まず1920(大正9)年に山田は東洋製紙株式会社取締役役に就任し、1923(大正12)年5月6日には東京の日本橋倶楽部において茶道宗偏流第8代家元の襲名披露宴を挙げて、茶道家としての地歩を確たるものとした。<sup>(71)</sup>同年にオスマン朝の崩壊を受けて、後継国家としてトルコ共和国が成立した。そして新生トルコ共和国と日本との間に、1924(大正13)年のローザンヌ条約を皮切りに外交関係の構築が急速に進められることとなった。

この状況にあって、山田は大阪商工会議所の稲畑勝次郎会頭に接近し、1925(大正14)年10月に大阪商工会議所内に稲畑を会長に推戴する形で日土貿易協会を設立させ、山田自身は理事長の要職に就任した。山田はこの日土貿易協会を通して日本とトルコ共和国との間の貿易事業の推進に乗り出したのであった。

こうした人生の変革のなかで、久々に徳富蘇峰に宛てた山田書簡が確認される。1926(大正15)年7月に徳富蘇峰に宛てられた山田書簡k(写真⑪、校訂k参照)は、著名人である徳富蘇峰に対して茶人である山田が揮毫を求めている書簡である。

1928(昭和3)年10月、日本・トルコ通商条約が締結された。また同年に商工省によりイスタンブルに創設された「コンスタンチノーブル日本商品館」(後に「イスタンブル日本商品館」と改名)の運営管理は日土協会との争奪戦の末に日土貿易協会に委ねられることとなった。山田の宿願たる

両国間の貿易事業が華々しく幕を開けた。<sup>(72)</sup>

しかし日本側の思惑とは裏腹に新生トルコ共和国は、国内産業保護のために諸外国との貿易事業を厳しく制限し、日本もその例外とはならなかった。そのために日土貿易協会は漸次、貿易対象国をトルコ共和国に限らず、周辺のパルカン諸国・アラブ諸国などにまで対象を広げる傾向を強め、1937（昭和12）年6月に至って名称を「近東貿易協会」と改めた。このような経緯で日本とトルコとの間の通商関係は暗礁に乗り上げ、同年末までにイスタンブール日本商品館も閉鎖されてしまった。

日本とトルコ共和国との間の貿易事業が停滞するなか、はやくから山田もトルコ共和国との貿易に限界を見出していた。1930（昭和5）年秋に日土貿易協会理事長として山田は、久々にギリシャとトルコを訪問した際にまずギリシャのサロニカ（テッサロニキ）商品見本市に参画してギリシャとの貿易に活路を見出した。山田はギリシャに接近を試み、ついに1933（昭和8）年10月23日に大阪在住ギリシャ名誉領事に就任した。当時のトルコ・ギリシャ関係を考慮すると、日土貿易協会理事長がギリシャ名誉領事と就任するという事態、さらには日土貿易協会が近東貿易協会と名称を変更してトルコ共和国との貿易事業を見直したということに対して、当時のトルコ共和国側がどのように受け止めたのかは文書をはじめ様々な史料によって検証すべき重要課題である。

こうした状況変化の中であって、山田はギリシャ名誉領事の肩書きを好んで用いていた。山田自身の旅券や名刺などにその事例を確認することが可能であり、山田書簡m（写真⑫参照）のように1940（昭和15）年、1941（昭和16）年に徳富蘇峰に宛てられた印刷年賀状もその事例として注目に値する。

## V. 第二次世界大戦後

1939（昭和14）年にヨーロッパにおいて第二次世界大戦が勃発する前に日本とトルコ間の通商関係はなくなっていた。1941（昭和16）年に日本が第二次世界大戦に参戦しても、トルコは中立国の立場を守り、外交関係は継続していた。しかし、1945（昭和20）年1月3日にトルコ大国民議会は日本との外交関係断交を決議し、同月6日に駐トルコ日本大使館は閉鎖され、ついで2月23日にトルコ大国民議会は日本に宣戦布告した。トルコの一連の対応は、戦争の行く末が決したなかでアメリカを中心とする戦後の世界政策に参画するためのものであった。

戦争は徳富蘇峰にも山田にも大きな影響を与えた。戦時中の1943（昭和18）年に徳富蘇峰は東京大田区を離れて静岡県熱海市に居を移していた。1949（昭和24）年に久々に山田は徳富蘇峰に書簡を送っている。この山田書簡n（写真⑬、校訂n参照）は、戦時下・戦後の無沙汰を経ての書簡であるが、この書簡の存在自体、この頃に徳富蘇峰と山田との間に交流が途絶えていたことを明かしている。ついで1951（昭和26）年8月にも自己の近況を伝える葉書の山田書簡が現存している。この書簡から約1ヶ月のちの9月8日、サンフランシスコ講和条約が締結されて、翌1952（昭和27）

年4月28日に発効した。トルコ共和国も戦勝国としてこの条約に署名をし、日本との国交を回復した。こうした両国間の外交関係の変遷のなか、大阪在住ギリシャ名誉領事の職を失ったのであろうか山田はいつの頃から再びトルコ志向へと回帰を果たしている。

このころの徳富蘇峰と山田との交流は表面的なものに留まっている。山田から徳富蘇峰に宛てられた1953(昭和28)、1954(昭和29)、1956(昭和31)、1957(昭和32)年の4通の官製年賀状が徳富蘇峰記念館に収蔵されるが、自筆添え書きは全く存在しない。それはイスタンブールから何度となく発信された能弁な山田の書簡群とは好対照をなす。高齢ということもあるだろうが、戦後における両者の交流が疎遠であったことを物語る。

最後の書簡から1ヶ月あまりの後、1957(昭和32)年2月3日に山田寅次郎は没し、それから9ヵ月後の同年11月2日に徳富蘇峰も没した。

## おわりに

以上のように、徳富蘇峰に宛てられた山田寅次郎の書簡に含まれる内容を、文書史料や叙述史料など様々な日本語史料を用いて逐一検証していくと、従来ほとんど実態が不明とされてきたイスタンブールの中村商店における人間関係のネットワーク像の一端を解明することが可能となることがわかった。一つの事例研究として徳富蘇峰に宛てられた書簡の分析だけでも、中村商店に関して様々な未知の情報を得ることが出来るのである。本稿では未公開の文書史料をあまり扱うことが出来なかったが、山田寅次郎や中村商店を訪れた人々の書簡・日記・覚書などが発掘・分析されればさらに多くの情報を得ることが可能であろう。また紙片の都合で本稿では触れることのなかったイスタンブールのオスマン文書館に収蔵される文書史料や、オスマン語の新聞・雑誌などの逐次刊行物史料をもあわせて分析して中村商店の実態をさらに解明していくことを今後の課題としたい。

近年、日本とトルコ双方の様々なメディアにおいて、山田寅次郎が伝説的に取り上げられるようになっている。しかしそのいずれもが山田の自伝と評伝とを鵜呑みにし誤解し曲解したものとなっている。筆者自身、日本とトルコの双方において何度かメディアの制作現場に立ち会ってその安易な手法に驚愕した体験を有する。山田寅次郎の功績を決して否定するものではないが、何より山田寅次郎の事跡の検証を虚心坦懐に行わなくてはならない。創られた美談や史実を歪曲した伝説は、日本とトルコとの真の友好関係に貢献するものではないと信じる。

学問の世界において、日記・自伝・評伝の類の史料は魅力的である一方、他の諸史料を発掘しながら事実関係を検証していくという作業を疎かにしてしまうと史実を見失ってしまうということは常識である。近年、ようやく中村商店に関して、学術的な検証作業が開始されだしてきている。筆者もこうした研究動向のなかで諸史料の検証作業を進めていきながら、中村商店の実像、さらに大きな枠組みでもって日本・トルコ関係史の実態を明らかにしていきたい。

※史料収集にあたり格別なる御高配を賜りました徳富蘇峰記念塩崎財団徳富蘇峰記念館、大阪府箕輪市役所行政史料室、同志社大学学術情報センター貴重資料室、日本建築学会建築博物館、トルコ共和国の総理府古文書総局オスマン文書館（Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü Osmanlı Arşivi）トルコ共和国における調査・研究許可に対して便宜を図って載いております駐日トルコ大使館（Japonya'daki Türkiye Cumhuriyeti Büyükelçiliği）の関係各位に感謝の意を表したく存じます。

※本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究C（一般）、研究課題「日本・トルコ関係史の基礎的研究」【研究代表：三沢伸生、研究課題番号：20520623、平成20～22年度実施予定】の研究成果の一部である。

## 註

- (1) 高橋 2007, 24頁。
- (2) 中村商店における山田寅次郎の位置づけは難しい。中村商店という名称から分かるように、山田は中村商店に仕える使用人であるが、日本とオスマン朝との間における貿易事業の開拓に乗りだした行動主体は山田にある。後に中村家と血縁関係を結ぶことからみても単なる使用人というよりは、支配人のような立場にあったとみてよいであろう。本稿で扱う、朝比奈知泉が1896年にイスタンブールで出会った山田のことを「主管（ばんとう）」と表現している（朝比奈 1938, 148頁）ことから、本稿でもこの表現を用いることとする。
- (3) 中村商店および山田寅次郎に関しては、ESENBEL 1994, 1996, 1999a, 1999b, 2002, 松谷 1986, 1998, 長場 1996, 2000が先駆的研究であった。これらを受け継いで近年に結実した中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査委員会 2005, 三沢 2002, 2003a, 2003b, 2003c, 2004, 2006-, 2007, MISAWA & AKÇADAĞ 2007, 2008, 稲葉 2003, 2006, 坂本 2005, 高橋 2007-といった実証的研究によって、様々な史料が発見・分析されて上記の先駆的研究に数多くの修正が必要であることが指摘され始めている。その一方で、こうした学界の動向に反して、依然としてマスコミの分野では検証不十分なままに、修正を顧みない傾向が見られる。その最新例として山田・坂本 2009。
- (4) 山田1911a, [126-127]頁（同書は本編前後に挿入する寄書・書簡部分に頁数を打っていない）。書簡は1910（明治43）年9月の日付となっており、同書奥付に示される印刷年月日である12月の直前になって届いたものであることが確認される。評伝内は、山樵亭主人 1952, 47頁。しかしながら評伝に記載されるロシアのトルストイ宅における君が代斉唱の逸話は、本稿で扱う山田書簡cにおいてイタリアでの逸話として記されている。筆者の別稿（MISAWA 2007, MISAWA & AKÇADAĞ 2008）において示してきたように、山田の評伝に含まれる情報の信憑性は極めて低く、様々な補完史料によって十分に検証されなくては史実として認めることはできない。
- (5) これらの書簡の存在は、既に日本とトルコの複数の研究者の間には知られていた。しかし、ERDEMİR 2007のように、書簡の存在を示すだけに留まるのみで、書簡を本格的に校訂・内容分析したうえで書簡に含まれる情報を研究したものはほとんどない。
- (6) 杉井 1977, 259頁。以後、本稿で示す徳富蘇峰の欧米滞在旅行の日程や内容については全て杉井の研究成果に依拠する。
- (7) 徳富 1935, 324頁。
- (8) 「土耳古に於ける皮相一斑」『国民新聞』2087号, 1897年1月5日（再録：『蘇峰文選』民友社, 1915年、

- 447-456頁)、「君士丹丁堡」『国民新聞』2109号、1897年1月30日、「蘇峰生の書簡(1の上、1の下、2)」『国民新聞』2115-7号、1897年2月7日～10日、「近東と極東」『国民之友』330号、1897年、57-69頁。欧米旅行中における徳富蘇峰の寄稿に関しては、徳富蘇峰記念塩崎財団(編)1985、540-4頁を参照。
- (9) 追遠文庫が非公開のために4通の書簡を現物確認することは出来なかったが、国民新聞に掲載された4通の書簡は杉井が自身の研究書に校訂が施したうえ途中で中略を挟む部分があるが、大部分を引用しており、その内容を知ることが可能である(杉井1977、327-339頁)。しかし将来的課題として4通の徳富蘇峰書簡の完全なる分析を行い、徳富蘇峰のイスタンブル滞在の全貌を解明することが必要である。
- (10) 杉井1977、327頁。
- (11) 同上、338頁。
- (12) 「…私共は侍従武官の紹介ニテ宮廷より宮内の寺院ニ御参詣の途次参観ノ榮ヲ浴申候。…」(10月23日付徳富蘇峰書簡、杉井1977、327頁)侍従武官とは、山田書簡に出てくるメフメト・ベイ(Mehmet Bey)のことだろう。現在のところ、筆者はこの人物の特定することが出来ていない。またこの参詣はイスタンブル刊行の英字新聞にも報道された。*Oriental Advertiser*, October 24, 1896. この記事で山田は「日本人商人」と記され、徳富蘇峰と深井英五は「所有者」と「編集者」と記されている。徳富蘇峰は漢字で署名したのか、紙上では「Kia-Fou-Tou-Ma」と転写されている。当該記事の切抜きは徳富蘇峰記念館に所蔵される(徳富蘇峰記念塩崎財団(編)1985、336頁)。
- (13) 現在のところ、この新聞記者名を特定できていない。当時のイスタンブルにおけるメディアは充分に発展していた。徳富蘇峰と深井英五のイスタンブルでの活動および現地で彼らがどのように認識されていたかを知る上でも、当時イスタンブルで刊行されていたオスマン語(アラビア文字表記の古典トルコ語)および外国語の諸新聞にかんする調査を今後に行う予定である。
- (14) 『蘇峰自伝』に所収された「外遊當時コンスタンチノーブルに於ける蘇峰翁及び深井英五氏」と説明の付せられた写真が当該写真と思われてきた(例えば、杉井1977、331-2頁、早川1968、129頁)。しかしその実、何らかの手違いで『蘇峰自伝』に掲載された写真は当該写真ではなく、12月4日にローマにおいて撮影された二人の写真である。短期間で版を重ねた『蘇峰自伝』であるが、筆者拙蔵の40版(1935年9月18日刊行)でも修正はされておらず、恐らくは最後まで修正されなかったのではないかと推測される。なおイスタンブルで撮影された写真とローマで撮影された写真の現物(蘇峰自身が記した写真の裏書から、焼増しではなく10月27日書簡に記される現物と判断するのが順当)は現在も徳富蘇峰記念館に収蔵・陳列されている。またこの写真は山田の評伝にも所収されている(山樵亭主人1952、巻頭写真参照)。
- (15) 朝比奈1938、107-8頁。
- (16) 同上、124頁。
- (17) 同上、148頁。一方で山田の自伝・評伝では、知己とはされるものの、ほとんど朝比奈知泉の情報を見出すことはできない。
- (18) 幸田露伴と山田寅次郎との接点については、柳田1942、1947および様々な諸史料を掘り起こした労作である出口2006に詳しい。また幸田露伴の「酔興記」(幸田1893)に符合する記述が山田の評伝に記されている(山樵亭主人1952、3頁)。
- (19) 幸田1892-93、37頁。
- (20) 幸田露伴と徳富蘇峰あるいは朝比奈知泉とが知己となった経緯は不明であるが、エルトゥールル号事件より以前の段階で文学会において三者の間に何らかの交流が生まれていたことが書簡より確認される。文学会関係書簡(明治21年8月～明治24年4月)(徳富蘇峰記念塩崎財団(編)1985、49-55、518-9頁)を参照。
- (21) 露伴「国民新聞の今回発刊せらる々につきて」と題して、「花は咲たりさて／こけまてを梅に所望」と歌を送っている(『国民新聞』創刊号、1890年2月1日)。
- (22) 山口1911、156頁。
- (23) 朝比奈1927、108頁(本稿は「東欧巡遊記」『東京日日新聞』に掲載された1896年8月31日付アテネ発信記事の再録)、朝比奈1938、169-71頁。
- (24) 朝比奈1927、107-8頁、朝比奈1938、148-9頁。
- (25) 田健治郎伝記編纂会1932、105-7頁、*Malumat*, 59, H.1314/R.1312 (=1896), 221-2, Şahin 2001, p.109. また山田の評伝によれば1897年に山田は田の紹介状を携えて商業視察のためにルーマニアを訪問している(山樵



亭主人 1952, 63-67頁)。

- (26) 同志社大学学術情報センター貴重資料室蔵。本書簡は文献目録に示したURLでもってインターネット上に公開されている。
- (27) 何れも「ペラ大通り81番地」と住所表記のある中村商店の便箋を用いているが、例外は山田書簡cであり、オスマン商工会議所の便箋が用いられている。山田が特別な意図をもって使い分けていたのか、偶然なのかは分からない。しかしこのオスマン商工会議所のレターヘッド便箋が使用されていたことも中村商店と商工会議所の関係を示す証拠となっている(写真③右を参照)。
- (28) 中村譲氏は中村健次郎が1893(明治26)年にイスタンブルに渡ったと証言し(大阪府箕輪市役所行政史料室 1999, 3頁)、これに基づいて稲葉氏も中村が山田ともにイスタンブルに渡って中村商店を開いたとする(稲葉 2006, 8頁)。しかしながら管見の限り中村譲氏の証言以外にそのことを証明する史料は見出されていない。山田が1893年にイスタンブルを再訪問して居住し始めたことは様々な史料で確認できるが、中村健次郎がイスタンブルに居住していたことを確認できるのは本稿で示すように1897年4月以降である。1893年に中村が山田と一緒にイスタンブルに渡ったとしても、それが短期滞在であったのか長期滞在であったのかは検証されていない。また同じく中村商店の存在を言及した史料のうち現在のところ最も古いものは、本稿で紹介した1896年7月の朝比奈知泉の記述である。山田の再来訪から朝比奈の到来までにイスタンブルを訪問した人々の関係史料から中村商店への言及が現在のところ発見されていない。したがって高橋氏が指摘するように、開店に関する客観的史料は発見に至っておらず、イスタンブルにおける山田の存在が物理的な中村商店の開店を意味するのかどうかは分からない(高橋 2007, 24頁)。
- (29) 稲葉 2006, 8頁。確かに中村譲氏は中村健次郎が1893(明治26)年にイスタンブルに渡ったと証言している(大阪府箕輪市役所行政史料室 1999, 3頁)。山田が1893年にイスタンブルを再訪問して居住し始めたことは様々な史料で確認できるが、中村健次郎がイスタンブルに居住していたことを最初に確認できるのは本稿で示すように朝比奈が再訪した1897年4月である。もし仮に1893年に中村が山田と一緒にイスタンブルに渡ったとしても、それが短期滞在であったのか長期滞在であったのかは検証されていない。
- (30) この書簡は『読売新聞』6128号、1894(明治27)年8月24日に掲載された。
- (31) 池辺 2002, 295-302頁。
- (32) 「中村為三郎」(無署名 1926(3版))。またこれを根拠に、中村商店の開店時期に関して、1896年2月から12月まで山田が一時帰国した頃と主張するもの(坂本 2005, 383頁)があるが、その時期に山田が日本へ一時帰国したと考えるのは全くの誤りで、それは山田の評伝(山樵亭主人 1952)の記述を検証しないままに引いていることに起因する。山田の評伝において最初の一時帰国の時期は不明瞭であるが、日本における様々な史料から1892年10月から1893年の夏にかけて(詳しくはMISAWA 2007参照)である。また、山田の評伝に所収される口絵写真内の福島安正(1852～1919年)の書簡には、1896(明治29)年1月に山田の商店がペラ大通りに移転したとある。恐らくはペラ地区のハゾップロ・パッサジュから、ペラ大通り81番地へ移転したのであろう。もしかしたら中村商店へと衣替えに際して、移転が行われたのかもしれない。
- (33) 鎌田 1899, 250-85頁。
- (34) 黒田(編) 1920, 207-8頁。また山田の評伝にも山田が寺内を接遇した際の逸話が記される(山樵亭主人 1952, 46-7頁)。また評伝の巻頭写真には寺内が1896年12月にイスタンブル訪問した際に詠んだ自筆和歌が収録されている(同上、巻頭写真)。
- (35) 山田はこうした時事的事件やオスマン朝の貿易事情などを『太陽』をはじめとする日本の雑誌に寄稿している(山田1893, 1895a, 1895b, 1896a, 1896b, 1899a, 1899b参照)。
- (36) 『国民新聞』2205号、1897年5月27日。
- (37) 朝比奈 1927, 160-1頁(本稿は「巴爾幹半島の昔遊」『黒白』7, 9-11号, 1918年の再録。しかし同誌当該号は公的機関に所蔵が現在のところ確認されていない)、朝比奈 1938, 150-4頁。
- (38) 朝比奈 1927, 161頁。
- (39) 幸田露伴との交友関係については前述の通り。村松志保子については、原島 2000, 2003, 2005, 2006, 出口 2006, 81頁を参照。清浦奎吾は山田がイスタンブルに到来する以前、1891(明治24)年12月下旬にイスタンブルを訪問し、その際にオスマン朝は野田正太郎に依頼して接遇を任にあたさせた(無署名 1935, 上巻、

- 325-6頁)。本来、山田と清浦の間にイスタンブルにおいて接点は存在しなかったが、山田書簡hの記述から、山田は徳富蘇峰に紹介を依頼し、清浦から書簡を得て知遇を得たと分かる。山田の評伝に山田が接遇することが不可能であった清浦の名が挙げられている(山樵亭主人 1952, 47頁)のは、こうした経緯によるものであると判断される。
- (40) 徳富 1899, 312-317頁。なおこの計報書簡(ギリシャ語とフランス語併記)は現在も徳富蘇峰記念館に収蔵・保管されている。
- (41) 家永 1900, 135頁, 長場 2000, 138頁。家永が1899年5月10日付で徳富蘇峰に宛てて台湾からイラン・オスマン朝・インドなどへ調査に派遣される旨を知らせる書簡が、徳富蘇峰記念館に収蔵・保管されている。
- (42) 『報知新聞』7745号、1898(明治31)年8月31日。この記事ではイスタンブルの中村商店は「日出商会」と紹介されている。しかし史料に乏しく誤りなのか名称が変更されたのかは確定できない。
- (43) 『読売新聞』7923号、1899年7月30日。
- (44) 山田 1911b, 11頁。しかしながら新月会が本当に組織されたのか、継続して運営されたのかどうかなど全く不明であり、今後の検証を待たなくては事実として認定することは難しい。また朝比奈は山田の『土耳其畫観』刊行に際して、阪谷芳郎、長崎省吾に続いて長文の書簡を寄せており、山田と朝比奈の良好な関係をうかがわせる。佐々友房は1897(明治30)年3～12月に欧米諸国を歴訪した。現在調査中で未確定事項であるが、恐らくはその際に佐々はイスタンブルを訪問したのではないと思われる。
- (45) 大阪府箕輪市役所行政史料室 1999, 3-4頁。中村譲氏は山田の一時帰国の主目的は結婚であると指摘し、その結婚を1900(明治33)年と述べているが、日本へ一時帰国した山田が1899(明治32)年10月14日に丹羽丸に便乗して12月3日にイスタンブルに戻ったと長場氏は比定されている(長場 1996, 49頁)。
- (46) 近衛篤磨(著)・近衛篤磨日記刊行会(編) 1968-9, 第2巻, 392-9頁。日記によれば、イスタンブル到着の2日前にルーマニアから中村健次郎に対して到着を知らせる電報を打っている。すなわち近衛が当初より中村商店と接点を有していたことが分かる。
- (47) 山田の評伝では両者の訪問年を明示していない(山樵亭主人 1952, 33-34頁)が、『土耳其畫観』に収録される両者が読んだ歌に付せられた日付から1900年の前半であると分かる。山田および中村商店の煙草・アヘン関連事情については、まだ詳細は明らかになっていないが、とりあえず大阪府箕輪市役所行政史料室 1999および坂本 2005を参照。
- (48) 中村直吉・押川春浪(編) 1910, 160-1頁。上記の山田書簡jの推定投函日程からすれば、中村直吉の到来は10月はじめか、あるいは年末までに山田が日本から戻ってからと推定される。確証する史料の探索が望まれる。
- (49) 三沢 2006-, 三沢(監修) 2008を参照。
- (50) 井上 1911, 317-378頁。井上はその冒頭部分で1903年の訪問時を短く回顧している。井上 1942, 282-6頁。
- (51) 稲葉 1999を参照。この研究により山田の自伝や評伝に記された内容を十分に検証する必要性の認識が学界内において高まった。
- (52) 伊東忠太資料『野帳』第10巻(土耳其・埃及)を参照。
- (53) 山田 1939, 157-8頁。
- (54) 山樵亭主人 1952, 50頁。
- (55) 大阪府箕輪市役所行政史料室 1999, 4頁。
- (56) 長場 1996, 59頁、坂本 2005, 381-385頁。
- (57) 山樵亭主人 1952, 61頁。
- (58) 森岡 1937, 98頁。
- (59) 「乃木大将渡欧日記」明治44年7月21日～24日(乃木神社社務所(編) 1994-7, 下巻, 429-437頁に所収)。松谷氏はこの日記に出てくる中村とは山田寅次郎のことだと指摘する(松谷 1998, 79, 99頁)が、全くの間違いである。また稲葉氏は中村姓ゆえに中村健次郎と認識されている(稲葉 2006, 10頁)が、それも全くの間違いである。本稿で示すように中村栄一である。
- (60) 徳富 1906, 222-251頁、長谷場 1907, 115頁。
- (61) 故阪谷子爵記念事業会(編) 1951, 320頁および山田 1893に所収される阪谷の序文。
- (62) 坪谷善四郎は博文館より1907(明治40)年に創業20周年記念祝賀に際して特に慰労として、9月4日から

翌年4月2日までの約7ヶ月間にわたり世界漫遊に派遣された(坪谷(編) 1937, 203-4頁)。博文館側は、その目的を欧米諸国の近情研究と説明する一方、本人は農商務省から囑託された出版業の視察ならびに東京市議員としての東京市参議会から囑託された各国都市制度の視察(坪谷 1911, 3頁)としている。坪谷は博文館の重鎮として、1895(明治28)年に創刊された日本初の総合雑誌である『太陽』において創刊号(1895年1月1日刊行)から第7号(1897年4月5日刊行)まで編集主幹を務めた(上野 2007, 282頁)。山田寅次郎は坪谷が編集主幹を務めた最後の第7号を皮切りに、1899年まで記名が確認されるだけで6回にわたり『太陽』にトルコ関係の記事や写真を寄稿している(山田 1895a, 1895b, 1896a, 1896b, 1899a, 1899b)。坪谷と小塚とがオリエント急行に便乗してブルガリアから1月11日午前10時にイスタンブルのシルケジ駅に到着した際に中村商店の川崎なる雇用人に出迎えられている(小塚 1911, 239頁)。すなわち事前に両者の到着は中村商店側に伝えられていたのである。こうした事実から坪谷のイスタンブル行に際して山田が仲介した可能性が高いと判断される。付言すれば、山田の『土耳其畫観』を1911年に刊行したのも博文館(山田 1911)であり、両者の関係を物語るものである。山田寅次郎と博文館との関係については稿を改めて論ずる予定である。一方、小塚は北濱銀行頭取の職にあり、1907年の創立10周年にあたり10年間の功労を認められて欧米漫遊各国に出た(三田商業研究会(編) 1909, 698頁)際に旧知の坪谷とイスタンブルに立ち寄った。

- (63) 井上 1911, 317-378頁、井上 1942, 486頁。徳富蘆花は自分の滞在中にアブデュルハミト2世が中村栄一を召して御下問したと記している(徳富 1906, 247頁)。これが事実とすると1906年6月下旬のこととなる。
- (64) 星野行則は大阪の加島銀行に属し、大阪実業界の重鎮であった。若くして渡米し、クリスチャンとなった。その後は大阪ロータリークラブの設立、カナモジカイの設立にかかわる。その後、カナモジカイの人間としてトルコ共和国の国字改革を調査する。
- (65) 徳富 1906, 237頁。松谷氏はN君とは山田寅次郎のことだと指摘する(松谷 1998, 79頁)。稲葉氏は中村健次郎と認識されている(稲葉 2006, 11頁)。両者とも全くの間違いである。N君とは中村栄一のことである。確かに山田の評伝に、山田によって便宜を与えられた人の中に徳富蘆花が挙げられている。本稿で示すように、山田は既に日本に帰還を果たした後と思われるが、イスタンブルの中村栄一に対して、徳富蘇峰の弟に便宜供与するように日本から指示したのであろう。
- (66) 坪谷 1909, 436頁、坪谷 1911, 296頁、小塚 1911, 239頁。
- (67) 黒板 1899, 736-50頁、立 1910, 554頁。
- (68) 星野 1912, 10-13頁。
- (69) 徳富 1906, 237頁。
- (70) 長場 1996, 50頁。
- (71) 同上, 53頁。
- (72) イスタンブル日本商品館については、とりあえず三沢 2006、三沢(監修) 2008を参照。

## 参考文献 <abc配列>

### 文書史料(日本語)

伊東忠太資料『野帳』第10巻 土耳其・埃及【日本建築学会建築博物館蔵】。

(日本建築学会建築博物館デジタルアーカイブスに所収)

URL [http://news-sv.aij.or.jp/da2/yachou/Gallery\\_3\\_chuta2-10k.htm](http://news-sv.aij.or.jp/da2/yachou/Gallery_3_chuta2-10k.htm)

大阪府箕輪市役所行政史料室 1999.「中村議氏聞き取り調査の報告」(未刊行)。

徳富蘇峰宛の朝比奈知泉書簡。【同志社大学学術情報センター貴重資料室蔵】

(同志社大学学術リポトリジ上に所収)

URL <http://elib.doshisha.ac.jp/denshika/asahina/150/imgidx150.html>

徳富蘇峰宛の山田寅次郎書簡(全19点)。【徳富蘇峰記念館所蔵】

- 伊藤隆ほか(編)1982-87.『徳富蘇峰関係文書』山川出版社,全3巻.  
徳富蘇峰記念塩崎財団(編)1985.『徳富蘇峰記念館所蔵民友社関係資料集』三一書房.  
——— 1995.『徳富蘇峰宛書簡目録:財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵』徳富蘇峰記念館.

#### 叙述史料(日本語)

- 朝比奈知泉 1927.『朝比奈知泉文集』朝比奈知泉文集刊行会.  
——— 1938.『老記者の思ひ出』中央公論社.  
田健治郎伝記編纂会(編)1932.『田健治郎伝』田健治郎伝記編纂会.  
長谷場純孝 1907.『欧米歴遊日誌』民友社.  
早川喜代治 1968.『徳富蘇峰』徳富蘇峰伝記編纂会.  
星野行則 1912.『見学餘録』警醒社書店.  
井上雅二 1911.『四大陸遊記』民友社.  
——— 1942.『興亜一路』刀江書院.  
家永豊吉 1900.『西亜細亜旅行記』民友社.  
池辺三山 2002.『欧羅巴漫遊日記』『文学者の日記(2)池辺三山2』(日本近代文学館:編)博文館新社..  
鎌田栄吉 1899.『欧米漫遊雑記』博文館.  
幸田露伴 1892-93.「書生商人」『庚寅新誌』68, 44-48頁, 69, 24-27頁, 70, 32, 35-37頁.  
——— 1893.「酔興記」幸田露伴『枕頭山水』博文館, 178-222頁.  
小塚正一郎 1911.『欧米巡遊日記』(増補3版、初版は1910年刊行〔筆者未見〕).  
近衛篤磨(著)・近衛篤磨日記刊行会(編)1968-9.『近衛篤磨日記』(全6巻)鹿島研究所出版会.  
故阪谷子爵記念事業会(編)1951.『阪谷芳郎傳』故阪谷子爵記念事業会.  
黒田甲子郎(編)1920.『元帥寺内伯爵傳』元帥寺内伯爵傳編纂所.  
黒板勝美 1899.『西遊二年欧米文明記』博文館.  
三田商業研究会(編)1909.『慶應義塾出身名流列伝』實業之日本社.  
森岡守成 1937.『餘生余録』日本国防協会.  
中村直吉・押川春浪(編)1910.『鐵脚縦横』(五大洲探險記:巻3)博文館.  
乃木神社社務所(編)1994-7.『乃木希典全集』全4巻, 国書刊行会.  
山樵亭主人 1952.『新月山田寅次郎』大阪:岩崎輝彦(私家版).  
立作太郎 1910.「土耳其の視察談」『國際法外交雜誌』8-7, 545-555頁.  
徳富猪一郎(=蘇峰)1899.『社会と人物』民友社.  
——— 1915.『蘇峰文選』民友社.  
——— 1935.『蘇峰自伝』中央公論社.  
徳富健次郎(=徳富蘆花)1906.『順禮紀行』警醒社.  
坪谷善四郎 1909.『世界漫遊案内』博文館.  
——— 1911.『海外行脚』博文館.  
山田寅次郎 1893.「土耳其埃及實況」『日本商業雜誌』26, 25-34頁, 27, 22-32頁.  
——— 1895a.「土耳其の演劇」『太陽』1-7, 115-118頁.  
——— 1895b.「土耳其婦人(オスマンリー・ハレム)」『太陽』1-12, グラビアと紹介文.  
——— 1896a.「土耳其通信(土京の近況附我全權公使派遣の必要)」『太陽』2-1, 29-31頁.  
——— 1896b.「コンスタンチノブル市の虐殺」『太陽』2-22, 146-148頁.  
——— 1899a.「土耳其事情」『太陽』5-20, 204-207頁.  
——— 1899b.「本邦飼鳥の話」『太陽』5-24, 158-168頁.  
——— 1901.「東歐所見」『東洋』1-10, 49-52頁; 1-11, 41-44頁; 2-1, 30-32頁; 2-3, 24-26頁; 2-4, 30-32頁; 2-5, 33-35頁.  
——— 1911a.『土耳其畫観』博文館.  
——— 1911b.「追懷録」山田寅次郎『土耳其畫観』博文館.全12頁.  
——— 1911c.「土耳其談」『貿易』12-9.4-12頁.



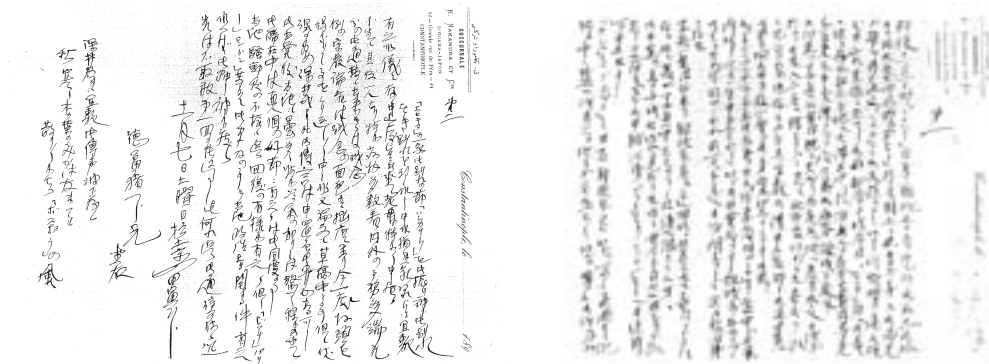
- 1931. 「土耳其商況視察談」『コンスタンチノーブル日本商品館館報』10, 5-15頁.
- 1939. 「回顧50年のトルコ」『回教圏』3.3・4, 154-159頁.
- 1939. 「トルコの柿の木」『日土協会展報』23, 75-78頁
- 山口孤剣 1911. 『明治百傑伝』洛陽堂.
- 無署名 1926 (3版). 『財界フースヒー』通俗経済社財界フースヒー刊行会.
- (再刊: 『日本産業人名資料事典Ⅱ』第1-2巻, 日本図書センター, 2001年).
- 無署名 1935. 『伯爵清浦奎吾傳』(監修: 蘇峰徳富猪一郎、編輯: 井上正明)、伯爵清浦奎吾傳刊行会、全2巻.

## 研 究

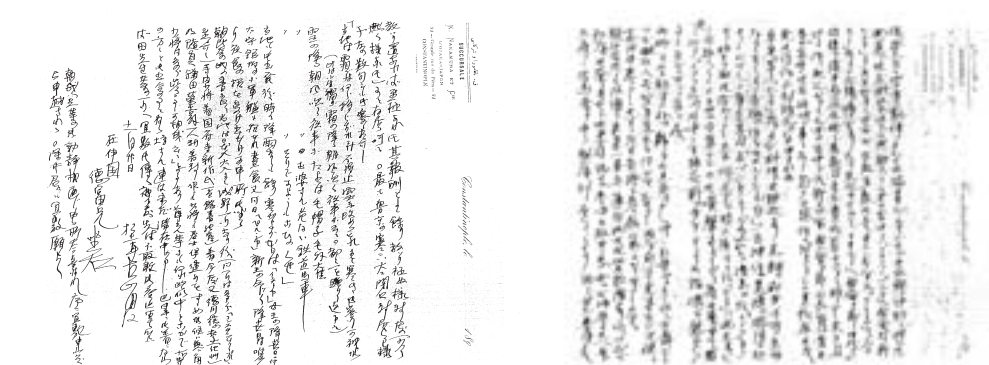
- 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査委員会 2005. 『1890エルトゥールル号事件報告書』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査委員会.
- 出口智之 2006. 「幸田露伴と山田寅次郎: 「書生商人」と「酔興記」をつなぐもの」『日本近代文学』74, 77-91頁.
- ERDEMİR, Ali Volkan 2007. *The Japanese View of Turkey during the Meiji Era : a study focused on Torajirō YAMADA*, Kyoto : Kyoto University (unpublished Ph.D. Thesis = 京都大学大学院博士論文).
- ESENBEL, Selçuk 1994. "İstanbul'da bir Japon", *İstanbul*, 9, pp.36-41.
- 1996. "A fin de siècle Japanese romantic in Istanbul", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, LIX-2, pp. 237-252.
- 1999a. "Osmanlı İmparatorluğu hakkında XIX. Yüzyıl Japon Seyahatnameleri ve istihbarat raporları", in *Osmanlı*, vol.2, Ankara : Yeni Türkiye Yayınları, pp.215-221.
- 1999b. 「世紀末イスタンブールの日本人」『近代日本とトルコ世界』(池井優・坂本勉: 編) 勁草書房、71-101頁. [後に "Japanese perspectives of the Ottoman World.", in *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, (eds. Selçuk Esenbel, İnaba Chiharu). Istanbul : Boğaziçi University Press., 2003, pp.7-41. に英訳再録].
- 2002. "Türk-Japon İlişkilerinin Tarihi", *Türkler*, vol.13, Ankara : Yeni Türkiye Yayınları, pp.149-161.
- 原島早智子 2000. 『明治の女医村松志保子 露文学の父八杉貞利』東京: 原島早智子 (私家版).
- 2003. 『明治すみだの華を歌う武家屋敷』東京: 原島早智子 (私家版).
- 2005. 『明治時代慈善の産医 村松志保子』東京: 原島早智子 (私家版).
- 2006. 『志保子の歩んだ道』東京: 原島早智子 (私家版).
- 池井優 2004. 「日露戦争とトルコ」『歴史読本』49-4, 168-171頁.
- 稲葉千晴 2003. 「日露戦争中のトルコ海峡問題: ロシア義勇艦隊通過をめぐる日露の争い」『都市情報学研究』4, 17-24頁.[後に "The question of the Bosphorus and Dardanelles during the Russo-Japanese War : the struggle between Japan and Russia over the passage of the Russian Volunteer Fleet in 1904", in *The Rising Sun and the Turkish Crescent*, (eds. Selçuk Esenbel, İnaba Chiharu), Istanbul : Boğaziçi University Press, pp. 122-144. に英訳再録].
- 2006. 「イスタンブールの中村商店と中村健次郎・山田寅次郎」『都市情報学研究』11, 7-12頁.
- 松谷浩尚 1986. 『日本とトルコ: 日本トルコ関係史』中東調査会.
- 1998. 『イスタンブールを愛した人々』中央公論社.
- 三沢伸生 2002. 「1890年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動: 「エルトゥールル号事件」の義捐金と日本社会」『東洋大学社会学部紀要』40-1, 77-106頁.
- 2003a. "Relations between Japan and the Ottoman Empire in the 19th Century : Japanese Public Opinions about the Disaster of the Ottoman Battleship *Ertuğrul* (1890) ", *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 18-2, pp.9-19.
- 2003b. 「1890 ~ 92年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動: 日本社会にとっての「エルトゥールル号事件」の終結」『東洋大学社会学部紀要』41-1, 57-91頁.
- 2003c. 「明治時代にオスマン帝国へと渡った日本人: 野田正太郎と山田寅次郎」『日本-トルコ友好史展』東京: キュレイターズ, 38-47頁.



- 2004.「1890～93年における『時事新報』に掲載されたオスマン朝関連記事:日本人初のイスラーム世界への派遣・駐在新聞記者たる野田正太郎の業績」『東洋大学社会学部紀要』41-2, 109-146頁.
- 2006-.「戦間期のイスタンブールにおける日本の経済活動(1),(2),(3)-:コンスタンチノーブル日本商品館(イスタンブール日本商品館)に関する研究」『アジア文化研究所研究年報』(東洋大学)41号, 199-180頁、42号, 258-90頁, 43号(近刊、以下、継続)].
- 2007. "The origin of the commercial relationship between Japan and the Ottoman Empire : the tactics of young *Torajiō* YAMADA, as a 'Student Merchant'", *The Bulletin of Faculty of Sociology, Toyo University* (=『東洋大学社会学部紀要』), 45-1, pp.51-87.
- (監修.) 2008a. 日土貿易協会『コンスタンチノーブル日本商品館館報/イスタンブール日本商品館館報』(DVD版, Ver.1) 東洋大学アジア文化研究所.
- 2008b. 「トルコ・日本関係小史」『トルコとは何か』(別冊環:14) 藤原書店, 164-173頁.
- MISAWA, Nobuo (=三沢伸生) & AKÇADAĞ, Göknur 2007. "The First Japanese Muslim, *Shōtarō NODA* (1868-1904)", *Annal of Japan Association for Middle East Studies* (=『日本中東学会年報』), 22-1, pp.85-109.
- 2008. "The First Japanese Language Education in the Ottoman Empire (1891-92) : *Shōtarō NODA's* Lectures in the Ottoman Military School", *The Bulletin of Faculty of Sociology, Toyo University* (=『東洋大学社会学部紀要』), 46-1, pp.219-248.
- 長場紘 1996.「山田寅次郎の軌跡:日本・トルコ関係史の一側面」『上智アジア学』14, 41-60頁.
- 2000.『近代トルコ見聞録』慶應義塾大学出版会.
- 内藤智秀 1931.『日土交渉史』泉書院.
- 坂本勉 2005.「山田寅次郎とトルコ・タバコ」『三笠宮殿下米寿記念論集』(三笠宮殿下米寿記念論集刊行会:編) 刀水書房, 381-393頁.
- 杉井六郎 1977.『徳富蘇峰の研究』法政大学出版局.
- ŞAHİN, F. Şayan ULUSAN 2001. *Türk-Japon İlişkileri (1876-1908)*, Ankara : Kültür Bakanlığı.
- 高橋忠久 2007.「イスタンブールの日本人商い事始-:中村商店小史(1)-」『アナトリア・ニュース』120, 20-24頁.
- 坪谷善四郎(編) 1937.『博文館五十年史』博文館.
- 上野隆生 2007.「雑誌『太陽』の一側面について」『東西南北』2007, 252-285頁.
- 山田邦紀・坂本俊夫 2009.『明治の快男児トルコへ跳ぶ:山田寅次郎伝』現代書館.
- 柳田泉 1942.『幸田露伴』中央公論社.
- 1947.『幸田露伴』眞善美社.



写真①：山田書簡 a



写真②：山田書簡 b



写真③：山田書簡 c（右：2種のレターヘッド部分拡大図）



写真④：山田書簡 d



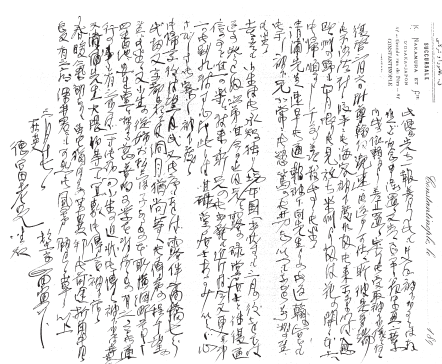
写真⑤：山田書簡 e



写真⑥：山田書簡 f



写真⑦：山田書簡 g



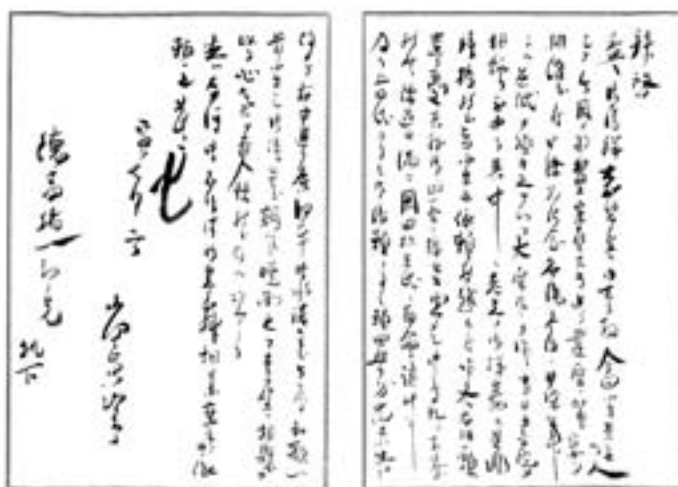
写真⑧：山田書簡 h



写真⑨：山田書簡 i



写真⑩：山田書簡 j



写真⑩：山田書簡 k

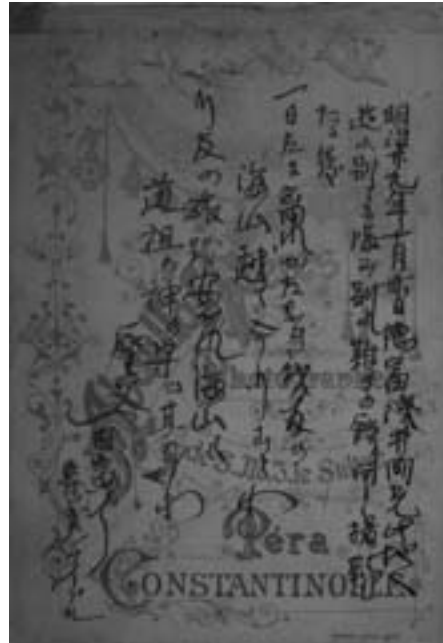


写真⑫：山田書簡 m



写真⑬：山田書簡 n





写真⑭：イスタンブールで撮影された記念写真  
 (左：徳富蘇峰、中央：山田寅次郎、右：深井英五) の表・裏 【典拠：徳富記念館蔵】



写真⑮：山田寅次郎と朝比奈知泉（左：残る 1 人はスピラキ氏、イスタンブール 1897 年、  
 右：山田、八代六郎、杉山茂丸、朝比奈 東京 1899 年）  
 【出典：左 池井 2004, 右 山樵亭主人 1952】

【書簡 a】一八九六年二月七日付

イスタンブル発 ウィーン宛 (写真①)

第一

拝復十一月一日附「ブカレスト」出尊翰昨五日着候先以テ御無恙御旅行の段大慶仕り候特に「ブカレスト」ニ於ては国王々妃皇太子に御謁見の榮を得られ又「シナヤ」ニも御出遊のよし何より以て欣賀遙ニ御祝び申上候其後も定めし御好都合にて昨今は「ピアナ」府へ御着候の頃と存候扱又当地へ御滞在中は店無人の爲め御案内等も充分出来不申失禮のみの段不悪御海容被成下度候

御約束の写真七葉は既に夫れく御宛名の地へ差出候又当地に

於ける御友人三名へ贈呈の分も夫れく配布仕候何れも大喜びニテ永

く記念の爲め保存可仕旨且つ宜敷御禮申上度特に御道中寒

気に向ひ候事故一層の御自愛祈上候この事ニ御坐候

又「マホメットパシヤ」の子息御出発の当日午後来店同パシヤより宮中の御案内致す可き旨申来られしも何分御出発後の事故残念ニ存候のみニ

御坐候左れば同パシヤが前一日「ホテル」へ御訪問ありしも全く右の次第と存候

写真一葉は在魯の朝比奈君へ送附仕候同君も大に喜致候事と

存候但シ鬼が写真中ニあらざりしは遺憾ならん阿々

御申置の鳥の子紙状袋見出し候但し唯今にては【御人】用なきや如何

若し【御人】用なれば御申越次第バリ」なりロンドン」なりへ御送附

可申上候事

「ブカレスト」とも「ブタツベス」とも田君朝比奈君【等】の一行も通過せし地特に中々盛の話有之候地なれば定めし何かの噂も御話【及に】

第二

「エニキヨ」の一家御別れの節「ハンカチーフ」を御振り被下御別れをしき別れを致し候よし申候猶は一家何れよりも宜敷有之候儀と存候 申上度旨ニ御坐候老母は特にく申居候小生も其後一人なり特に荷物多数着候内外の事務多端充分の御通報も出来ざるは残念

例の宗教論者は残念の面色にて拙店へ至り今一度拝顔を

得ざりし事をくり返しく申し候又論文も草稿中との事但し伏

線の爲め深井氏よりの御傳言は申置候間御安心ある可し

御出発後当地も曇多く特に冷気の加りしは驚く程に御坐候

御滞在中は眞個の好節ニ有之候は御同慶の事

当地騒動後の不振も追々回復の有様に有之候但し「ピアナ」バリ

」ロンドン」等にて御聞及の事ニテ当地政治上に関する件有之

候へば【御申し】被下度候

先は不取敢第一回の御返事迄何れ追々御通信可仕候以上

十一月七日土曜日に於土京山田寅次郎

徳富猪一郎兄

坐右

深井君にも宜敷御傳声被下度候

秋寒し木の葉のみかは友までも

散り／＼にちる「ボスポラ」の風

【書簡b】一八九六年二月二〇日付

イスタンブル発 ローマ着 (写真②)

復啓十一月十四日尊翰併二十七日出端書正ニ着候小生の御依頼の件ニ對シ種々御

配慮の段萬謝仕候何分可然願上候○本日宮中ニテ「マホメットバシヤ」へ面會致候所

ビアナ」より御出状あり候よし右正ニ受取宜敷御答へ申上度旨又「エニキヨウ」の「スピラ

キー」氏よりも全様の傳言ありたり先之キャブテン、リサーバー」へ面會の節同氏よりも

同様の儀申出られ候但し其節は未だ貴状着せざりし時にや其事は

何とも話し無之かりし又本日宮中ニテ式部長官ニ面會の節全長官は貴兄

等が宮中に御出ニ相成る事と存じ島ニテ御懇話も致さざりしに其後直ニ御出

発御談話不致残念の旨申され候

尊兄等へ「ビアナ」ニ於テ日本料理の御馳走あり黒鯛の刺身、牛肉の煮附

などもありしより青梅の話聞ならなくに自ら舌神經に異様の感情を起

せしもお可し○尊兄等は「赤パン」号にてじれ込れたる結果の後「コブラ」号

にて時間を取返給ひしよし夫に似て土京の晴天続きの後「ビアナ」の雨天ありし

とは扱も／＼も不自由の世界かなの御嘆聲ありしかと遙ニ御察申上候若

然し此より「イタリヤ」行は中々古跡名所の多かる事とて御旅魂を慰めらる、

事も多かる可くと存じ居候

両脚を■朝する杯の舞を御見物のよし中々お楽みの事但し右舞など

の本見物人なる望月先生も弥々日本ニ着のよし兩三日前一寸來書有之次便にハ

委細申來候よしに御坐候先生香港ニテ少々病氣にかかり候よしニ御坐候

朝比奈氏よりは續々來書一書互ニ薄用紙大凡四五枚繪【入り】以て同氏の

勉強御察ある可シ近來は隔日に魯語を教■る為め女のお師匠さん（原

文通りニ認む）來り申候勉強致し居らるゝとの事但し唯だ魯語又

教ハリ置なれば至極なれトモ其報酬として餘り教ハリ極め様致し度（少々

焼く様なれトモ）事と存居候呵々 ○最も魯京の寒ニハ大ニ閉口致し居らる様

子左の数句ニテも御察しある可し

「当地は霜では何分移らず候ニ付不得止雪に改め候それにて寒さ御察し可被下候

（此は小生嚮に霜の降る朝風吹く夜半に云々の都々一を贈りし返事ニ候）

雪の降る朝風吹く夜半にたよるは毛帽子毛羽大【佳】

♪ お婆さん危ない鉄道馬車

♪ そりやかようもこひのくせ」

当地も御出發後時々降雨ありしも餘り寒からず本日は「イタリヤ」女王の降世日ニ付

右守館附の小軍艦に招かれ晝食又同日「ベルシヤ」新王の全じく降世日付唯今

より夜食の招を受け出かけ可申所に御坐候

朝比奈氏の書に曰く当地は日本人大人にて浅野一行去り後（同一行は多分「コンスタンチ

ノブル」ニ

至る可し）寺内少將着国府寺新作氏（当館書記官）着今度又徳川侯の世子（紀州）

及隨員鎌田榮吉外一人新着致し【彼】ニも少將ニも君子保【保】行をすすめ候候ハ兎ニ角

少將は多分參る事ニ可相成云々」との事あり尊兄等にも何れ欧州中とこかで右等

の方々と御出合の事と存候坊さん連は未だ滞在中のよし巴里ニ御着ニなら

ば田先生等の一行へ宜敷御傳へ被下度先は不取敢御答迄草々以上

十一月廿日 於土耳其古山田拜

在伊国

徳富兄 坐右

朝氏へ兄等の御動靜相通じ申候所太ニ喜はれ候序ニ宜敷申上度旨申越され候○深井君にも宜敷願上候

【書簡c】一八九六年二月二八日付

イスタンブル発 パリ着 (写真③)

拝啓愈々御清適の段奉賀候次ニ拙家一同無事消光致居り候間乍憚御休心被下度候扱先般御別れの節は船迄御見送り可申の所少々不快の爲め失禮仕り候然しなから御乗船拙家の前流を進むニ当り甲板上より御手巾を御振り被下拙家一同も此ニ應じ大ニ御旅行の前途を祝し候儀拙家一同大慶此事ニ御坐候其後

「ピアナ」府より御尊翰を得再び拝眉を得候心地仕り候猶ほ

御前途遙となり時下又寒冷の節折角御自愛有之度

先は御返事相兼石申上度候草々拝具

千八百九十六年十一月廿八日

於土耳其国「コンスタンチノーブル」府

在英国

徳富猪一郎殿

深井英五殿 侍史

追伸拙家一同よりも宜敷申上度旨申出候間此段添て申上候以上

昨今「ホスボラ」ニテ釣魚ノ好期御滞在ナキヲ残念ニ存居候

【書簡d】一八九六年二月二二日付

イスタンブル発 パリ着 (写真⑧)

復啓本月五日ローマ府御差出しの御書面昨夕着先々御安全御旅行特に新聞記者のマカロニノ會に列国の先生方御會合にて日本演説の御雄辨を御振ひ被遊又深井君の美声にて君が代を吟

ぜられし等何れも赤髯記者を御驚せられし事と遙に喜び居候又ネーブルにて高山に馬を鞭れ候御雄壮中々ニ羨まし然し後々の御痛みはさぞかしと御察し申上候

当地何れも宜敷申度旨例の艦長は貴所の御書面を海軍大臣ニ

も披露致され候よし又当地の新聞紙上に全文を掲載致候との事ニ御坐候

日本ニ参られし宮中接待委員も御書面を得大喜び致居候

「エニキョウ」の翁は御返事を英国公使宛ニテ差出候宗教論者は

一昨日一大状袋持参ニテ大文章出来候間差出度宛所を承

知致度旨申し来候間此も英国(但し領事館へ)へ向け差出させ置候

当地も本年は珍らしく二週間程初雪ありしも其後又ノ天気

快晴昨今は又々小春日の如くニ御坐候

此一週間程前当地へ「ブダベスト」を経て徳川侯(紀州)及従員二名来着日々例の如く見物中ニ御坐候多分一兩日中ニ先発「アテナ」府を経埃及ニ遊び夫より伊国を経英ニ出るとの事(最も英国ニハ先之五ヶ月程滞在との事)ニ有之候間自然其中ニハ何所かにて御會合

有之乎と存候又寺内少将も多分本年中ニハ当地へ参らるとの

事戦野の番頭も或は参る可く実に当地は近年稀なる日本人

大人ニ御坐候魯國の坊さん連小坊頭兩名は同地ニ残り洞月和

尚は英京ニ出で米國を経て帰国との事お松老髯は「ラデスサ」

を経て当地ニ半日間滞在〔榎〕面白き失策話あり夫より「アレキサンドリヤ」

を経「ポルトサイド」ニ出で夫より日本郵船會社の船ニテ帰国との事多分

今日頃乗船致せし事と存候

お松老髯の話ニ朝比奈氏は本邦より帰れとの書面ニ接せしも自分は

其気なき故帰らぬぞよき乎との電文を出せしよし然し其返事

日本より何とありしかは知らずとの事昨今の政海或は本邦にて氏を

迎ふる事ニ而小生ニハ二週間程断音近状を詳に致さず〔可〕然小生よりは

三四通の書状出しあれば何れ不日返事ニ接し可申又貴所の御

近情も勿論申し通す可く候

小生の同業〔上二〕関し御通信被下候よし多謝又当地の事ニ関し御高

〔説〕を御送附のよし何れ御掲載の上は何卒御送附被下度偏に

希望仕候

当地〔國〕なれトモ山川自然の美他國ニ冠たるとの御評言小生致座ニ

あつて諸州の珍談を諸君より得愉快無極候先々英大使館ニも

一寸禮ニ参り置候何れ次便又々〔萬々〕可申上候以上

十二月十二日 於土耳其山田寅次郎

徳富兄

坐右

冬の期節折角御自愛專一ニ存候深井君ニも宜敷

御傳へ〔望〕候

〔書簡e〕一八九六年二月二十九日付

イスタンブル発 バリ着（写真④）

拝啓本月廿二日附「バリー」出の分同廿六日着先づ御無事欧州の山水明

月共ニ御遊覧扱ハ花のバリー」へ御安着のよし何より御喜び申上候当地へは

御申越の如く紀州の若主人候来着一行人日々所々見物大満足の

よしニテ当地出發「アテナ」府へ向ハれしも相憎其夜大風雨あり船中大閉

口命からがら「アテナ」へ着のよし申来り候次で廿六日同所出發埃及より伊

國を経て巴里、ロンドン」へ向候よしなれば定めし英京ニテ御面會に相成哉

又同一行出發後二日にして寺内少将立花大尉を伴ひ来京六

日間滞在軍隊の視察〔し〕陛下へ謁見の事も終りアテナ」より「ベルリン」へ

向ハれ候此行〔か〕先づ本年の打留めニ御坐候何に致せ本年は当地春以

来珍らしき日本人大人にて小生の如きも愉快に日を暮し一年の餘り

早すぎしを驚き居候如き次第第二御坐候

知泉氏は不相變魯京ニテ雪中の莊遊を試み居られ候本国よりは数々婦

〔京〕を促し来れトモ先生は黒髪よりも赤髪の肩に垂れたる方々々ニ

可愛ひしとて帰京の心更ニ無之様子ニ御坐候又望月氏は日本ニテ大

躍起政海に雄飛するとの事多分は議員位に出る事に可有之と存候

同氏は小生への春状も大多忙ニ付速記を以て申入候との冒頭又々数萬

言申越されたるにても同氏の勉強と多忙相察し居候



洞月和尚へ巴府にも突然御面會のよし特に御申越の如く言語無用ニテ世界独歩は小生も感服の外無之候同府より一寸小生へも一書を寄せ被下候○同時にお松老婦当地へ着半日滞在埃及へ向ひ「ポルトセイド」より日本船ニテ帰られ候同氏は当地にて曾て訪問せし美人を再訪し

僅の時間中ニ種々の面白き事ありし為め手荷物切符を買ふ事を忘れ埃及へ着候も体のみ上陸し荷物を受取事の出来ぬ大失策あり

(最も衣類等の手荷物ニあらず唯書籍書類のみ) 大閉口直に書を

小生へ飛し右を本国へ廻送方申来らる如き騒動是も美人様の御

蔭と思へば憎くもなき乎阿々

当地バシヤ大佐エニキヨウ翁其他何れも **より** 宜敷申上度旨毎々傳言

有之候勿論貴兄よりの御傳言も申述べ置候

当地も昨今はクリスマス新年次でグリキ「アルメニヤ」の新年至り可申又土

国の大祭「ラマザン」も近づき候為め小生も多忙を来し商業も少々回復

致し候有様兎二角豆にくらし居候間御安心可被下候

碌堂近 **作** あり

羨ましいそい土耳古でぬしは物いふ花■へに冬知らず

つまらないそいわたしは露西亜でながきにく、まる重合羽

特に曰く家を出る儘ニ二丁許息髭に凍り付きて俄ニ白髯となりし事と■に

**ひかり** なり云々中々に魯京の寒さ相察し居候当地は幸ひ昨今まだ軽き

外套一枚 **き** れば外出自由ニ御坐候尊地は如何

洞月和尚其後如何致候や田一行の諸君も如何御序あらば御通報被

下度且つ可然御傳 **へ** 被下度候

碌堂氏曰く欧州で蘇峰君に逢へては実に遺憾若し逢はゞ必ず美人訪問

の案内を致し一番蘇峰子の氣を奮んものと我兄氏言を聞いて如何思より氏も亦旅に一笑なり于時廿九年暮れんとする廿九日の夕認む

於土耳古山田生 拝

在巴府

徳富兄

坐石

【書簡f】一八九七年二月一七日付

イスタンブル発 ロンドン着 (写真⑤)

復啓二月五日の御端書併二十一日御認め貴状正二着候愈々御清適英

京ニ御着のよし旅枕の所変り品換る何れへ御出二相成るも御愉快の事のみ

と深く羨殺致居候生は貴兄御出発後徳川侯の一行寺内少将

一行も去られ例の唯一人語るに友なく孤燈光り寒く暮し居候然し

幸なるは本年は冬の寒さも強からず雪は三度ありしも何れも所謂雀の

三里位ひ朝寝ばけ顔に一寸見れば最早其影を止めざる程の次第却

て戀しき思ひある程ニ御坐候一夜「ボスボラス」に泊せし朝初雪ありし時は

其景も常ニ慣れ居る「ボスボラス」をして銀世界と変ぜしめし為め

一層目を新ニ致し貴兄をして此地ニあらしめば例の土耳古ボート」を浮べ快

談放言我心の清きを「ボスボラス」の水に洗ひ更に一新する所あらんものと独

言を申し候其後天晴気朗に数日にして大に温き日光を見るに至れば白

鷗の水に遊ぶ消へ残りの小草そろ／＼と又芽を出す様水には大魚の躍る

状此亦此觀を一人眺むるもおしく思ひ候但し此等天然の風景は恐らく

当地の独占ならんも政治上のごた／＼未だ其跡を断ず商況亦不振此等の事

を一々申上れば中々に当地も面白からず然し何も味ひ事ばかりでは此世界も

所謂浮世なぞと申す程の事も有之間敷因々は先づ此所で我慢を

致すより外致し方なしと存じ閉息致し居候

唯だ／＼店に至れば千客萬様の人々来るあり政客、軍人、書生、商人、

投機家、扱はお譲様奥様、おば／＼さん、おいしいさん等種々の人

々往来日に繁ければ話しまぎれ不識間に日を暮し居候次第第二御坐候

今回兼て御話しの画幅等中将初め両氏へ御贈送のよし御申越の

趣委細拝読何れ近々面會の節一々可申述候

碌堂氏は依然雪中ニあれトモ先生中々の勉強ニテ昨今は音に露語のみ

ならず佛語も研究のよし其片手に又美人窟をも中々襲ふ有

様なり小生の如き実には感拝平伏致すのみニ御坐候

徳川侯一行は多分二三週間内ニハ英京ニ着致する可く候先ニ「ローマ」

府より一寸来翰有之候洞月和尚は最早日本ニ着致す

日取なりや御承知もあらば御申聞せ被下度候

例の碌堂氏の通辨先生は同氏の語ニ依頼し日本公使館出来の上

通辨ニ相成度候旨ニテ小生方へ数々来訪あるには実ニ持餘し居候一週

間に一度は必ず来店例の語句ニテ数時間の長髯りくたらぬ事

をくり返し／＼申し至らるニハ閉口致居候呵々

御住ひの主人は熱心のクリスト教者のよし中々御窮屈の段御察申上候

但し深井君ニハ大向きのことと存候

英京の深霧中の御出入さぞかしと存候何分他郷萬里風土日に異なるの

地折角御自愛萬望の至ニ御坐候

四月頃迄御在英のよし数々拙書を裁し御左右相伺ひ可申候

二月十七日

寅次郎

猪一郎兄 坐右

本日は当地宗教上の祭中第五月ニ当り皇帝陛下離宮へ行幸ニ付例の「アルメニア」の件以後

第一回の行幸ニ付市民何れも萬一の事あらんを恐れ戸を閉さんと欲するに閉戸せる店は五

ポンドの罰金申付らる、事故こわ／＼なから何れも店は開き居れト市中物騒しく商業■

き断て無之候実には当地は火薬庫の如く何時如何なる事あるも知る可らず市中永住のものは

実は大膽

ならざる可からず呵々

【書簡g】一八九七年三月八日付

イスタンブル発 ロンドン着 (写真⑥)

拝啓其後如何御暮シ被成候哉当地は例の政治上のごた／＼の爲め商業又々不振特ニ

「クリート」島事件の爲め人心少しも安せず今にも戦争の開かる、事かの如く恐々然と

何れも日を送り居候列国より土国及び希臘へ申込候「クトート」島より兵隊引拂ひの有

無本日決答可致日限ニ付いとゞ本日は物騒かしく今後如何成り行く事やらと

何れも心配のみニ御坐候然し小生も如斯騒ぎには馬鹿馴れに馴れ候間今

にては左程ニ思ひ居り不申戦争が初まらば一番見物ニ従軍を願入と存

居候も何分商売の不振には一番閉口致し居候呵々

先般は「マホメットパシャ」「リカーベ」「スピニキ」氏へ日本画及び写真■御贈

呈のよしバシヤ」及び「スビニキ」への分は小生も拝見致候「リサー艦長ニハ其後

訪問せしも不在にて未曾合右両家ニテハ何れも大喜び厚く御禮申上度

旨又バシヤ」よりは別紙を送り越候間御送附申上候

先般御申聞の貴社雑誌上当地の事項御記載の分は何等御恵与

被下度萬望の至ニ御坐候

当地は幸いは天氣續きにて昨今既ニ春花蕾を破の陽色所々して

人を招かざるはなく美人の蓬歩才子の散策何れも楽ましげニ見

へ候

本郵ニも日露協會の旨意弥発表の模様に承知仕候猶ほ御聞込の事も

有之候や

朝比奈氏は先づ一年許在露候望月氏は目下著述中との報あり候兄は

今便多忙中茲ニテ御免を願候何れ次便 ■■■

三月八日

於土京山田寅次郎

在英京

徳富兄 坐右

【書簡h】一八九七年三月一七日付

istanbul 発 ロンドン着 (写真⑦)

此便に先ち一報差上候此も御入手被下候事とは存

候へども為念申添置候又先々スビラキ翁写真二葉

同氏の依頼により差上置候定めし御受取被下候儀と存候

復啓三月六日附尊翰拝読速ニ御返事可仕候所彼是多端

御不沙汰致候段平ニ御海容被下度候扱御来示によれば愈

欧州の野も本月限り御見放ち米州より扱は花の開く本土へ

御帰順のよし千萬羨殺此事ニ御坐候

清浦先生へ速早御通報被下同先生より又御返翰の旨をも

御示し被下兄が常ニ御懇篤の御芳志いつもなから萬謝の至ニ

御坐候

去る冬も小生は御承知の独りん坊本国へ出状するも三月の後ならでは

返事参らぬ次第唯今日迄は兄と露の碌堂居士と往復通

信の事を唯一の楽と致来候所兄の御出発も近ければ今又更に第

二の御別れ致す心地此上は唯碌堂居士あるのみいと心

ざびし御察し被下度候

御帰京後は望月氏又御序もあらば露伴高橋七郎

氏扱又京都に於ては洞月<sup>和</sup>猶尚等へ御傳声の程千望の

至ニ御坐候又小生の従姉お松志ほ子なるもの本所横網町五丁目十

四番地ニ安生堂と称する慈善的事業を致居候もの有之候間御通

行の事も有之候へば一寸御訪問小生の近状御傳へ被下候へは幸甚

又清浦先生大隈伯等へも宜敷御傳言被下度候

春暖氣朗なりと雖も猶ほ萬事異邦御前途折角御自

愛有之度深井君ニも可然御風声願上候草々以上

三月十七日 於土京 山田寅次郎

在英

徳富老兄坐右

【書簡j】一九〇二年二月一日付

モスクワ発 東京着 (写真⑨)

拝啓小生儀土帝の命を■み[至急]「シベリヤ」鉄道にて十月十日  
其途に上り本日

当地安着

仕候当地ハ

兄が曾

遊の

事とて

当年

トルストイ

伯御訪問の事

十一月一日夕

を想[過]し茲に

モスコ」にて山田寅次郎

伯の壮年の肖像を贈り併て右御報申上度如斯御坐候敬具

【書簡k】一九二六年七月二日付

大阪発 東京着 (写真⑪)

拝啓

益々御清祥大賀ノ至ニ御坐候扱今回小生茶道■人

ニシテ長岡ノ羽賀宗員大■迄■還暦ノ賀宴ヲ

相催度ニ付此際為記念名流各位ノ御染筆

ニナル色紙ヲ頂キ之ヲ以テ大扉風ヲ作り当日書院ヲ

相飾り度由ニテ其中ニ老兄ノ御揮毫モ是非

拝授致度旨小生迄依頼致越候ニ付昨冬右相願

置候處其後御回答ニ接セス定メシ御多忙ト拝察

致候際過日偶マ岡田松生氏ニ面會談致し候ニ

及々上田氏ヨリモ御依頼ノ事ニ頼置候が尚ホ小生ヨリ

改メテ右申進候条何卒御承諾被下度乍序和歌一

首小生ニモ御添被下度朝風晩雨之ヲ素壁へ相懸ケ

以テ心氣ヲ爽快致度存候次第二候

先ハ本便御不■御見舞相兼重ネテ御依

頼迄如此候■

寅

七月二日

山田寅次郎

徳富猪一郎兄

机下

【書簡n】一九四九年五月一九日付

大阪発 熱海着 (写真⑬)

尔来御不音ニ打過候が益々御清祥賀上候

扱戦災後住ミナレシ大阪ヲ去ツテ吉野■沿線ノ

古市ト申ス地ノ村莊ニ引移り候処不斗毎日新聞

社ノ加藤三之雄氏ト知合ニ相成リ貴台ノ御禮

サモ出テ昔懷シク存候折カラ最近同氏へ御贈リノ

由大泊不水舟山ノ二句幅大兄不相變之御健

筆感シ候

昨日■ハ小生初メテ土耳其ヲ訪問【致候】テヨリ六十年ニ相当

仕候間當時於紀州沖遭難ノ土耳其軍艦乗

込員五百九十一名ノ慰靈ノ法要ヲ営ミ申候何

分古キ話ニ御坐候

其中■ノ途久々拝顔ノ機ヲ得ラルレハ欣幸ト存候

先ハ御不沙汰御見舞旁如斯候也

己丑五月仲八

山田寅次郎

徳富蘇峰様

坐右



【Abstract】

A Case Study of Human Relations at *NAKAMURA*  
Store in Istanbul  
*Torajirô YAMADA's* Letters to *Sohô TOKUTOMI*

メルトハン・デュンダル

Merthan A. DÜNDAR

三沢 伸生

Nobuo MISAWA

The first private Japanese store in Istanbul, *NAKAMURA* Store, was established at the end of the 19<sup>th</sup> Century. Although there were no diplomatic relations between Japan and the Ottoman Empire, this store intended to set up trade relations between the two nations.

The first diplomatic relations were established after World War I. Until then, *NAKAMURA* Store was obliged to persevere as the only base for Japanese visitors.

We have little knowledge about this store. Recently there have been some academic attempts to search for some source materials about this store. There are 19 letters to *Sohô TOKUTOMI* written by *Torajirô YAMADA*, the employed manager of the store. In October 1896, *Sohô TOKUTOMI*, a famous journalist in those days, visited Istanbul during a research trip to European countries. *Torajirô YAMADA* received him warmly and guided him to various spots. After *Sohô TOKUTOMI* departed from Istanbul, *Torajirô YAMADA* wrote him letters.

We can find out personal information from these letters. Using such information, we can reconstruct the human relations at *NAKAMURA* Store. At first, only *Torajirô YAMADA* managed the store. Then, in 1897, *Kenjirô NAKAMURA* came to Istanbul to be the real manager as a member of *NAKAMURA* Family. After the Russo-Japanese War in 1905, both *Torajirô YAMADA* and *Kenjirô NAKAMURA* returned to Japan. To replace them, *Eiichi NAKAMURA* (*TOSAKA*) came to Istanbul to be the manager with his wife and son. When World War I started in 1914, the store was finally closed.

After *Torajirô YAMADA* came back to Japan, he succeeded in business. In 1925, he became the chief director of the Japanese-Turkish Trade Association. But it was very difficult

to establish trade relations between Japan and Turkey. In October 1933, he gave up on trade relations with Turkey and became the Honorable Consul of Greece in Osaka (Japan). But World War II changed everything. After the war, *Torajirô YAMADA* began to support friendly relations between Japan and Turkey again.